

# GRADUATION PROJECTS 2021

Tamagawa University  
College of Arts  
Department of Arts Education

玉川大学 芸術学部 芸術教育学科  
卒業プロジェクト2021 論文・演奏・制作

GRADUATION PROJECTS 2021 Tamagawa University College of Arts Department of Arts Education 玉川大学 芸術学部 芸術教育学科 卒業プロジェクト2021 論文・演奏・制作

令和2年度 玉川大学 芸術学部 芸術教育学科



Tamagawa University  
College of Arts  
Department of Arts Education

卒業プロジェクト2021

# GRADUATION PROJECTS 2021

Tamagawa University  
College of Arts  
Department of Arts Education

---

玉川大学 芸術学部 芸術教育学科  
卒業プロジェクト2021  
論文・演奏・制作

## 第四回 卒業プロジェクトに寄せて

2014年に「芸術による教育実践者の養成」を目的として開設された玉川大学芸術教育学科は、今春、四度目の卒業生を送り出すこととなりました。本学科は、音楽コースと美術・工芸コースを設置する全国的にも珍しい学科です。ふたつの領域の学生達は、入学時より教育を共通の価値観とし、互いの領域を身近に感じ、緑あふれる総合大学のキャンパスで深く相交わりながら学んでまいりました。

本学科では卒業プロジェクトにおいて、全学生が論文と実技（音楽コースは演奏、美術・工芸コースは制作）の双方に取り組むことが課されています。4年間をかけて、理論と実技の両輪をなすべく多くを学び、「芸術による社会貢献」の実践者として、展覧会、演奏会、社会的活動など数々の活動を積み重ね、内なる力を研鑽してきた成果の記録をここに発信いたします。

感染症COVID-19は世界に未曾有の混乱を招き、日本でもいまだに終息の兆しは見えません。学生たちは、春学期のオンライン授業、そして秋学期からのハイブリット授業（オンライン授業と対面授業の混合授業）で卒業プロジェクトに取り組んでまいりました。音楽コースは大学内ホールでの公開演奏会、美術・

工芸コースは横浜レンガ倉庫での作品発表を計画していましたが、緊急事態宣言下、いずれもスタイルを大きく変更しての発表となります。学生にとって、最終学年としての学生生活を大きく変容され、集大成である卒業プロジェクトのプロセスと最終発表において大きな制約を余儀なくされることがどれほど厳しいことであるかは想像に余りあります。この苦境からの学びは、今はまだ種子の状態かもしれませんが、いずれは個々においてたくましい力に変容することを信じてやみません。

卒業を迎える学生たちをこれまで見守りくださった皆様、芸術教育学科にお力添え頂きました関係各位に心より御礼申し上げます。学生たちは4月からは教員として教壇に立つ者、あるいは本学科の学びを活かしての仕事をする者など、それぞれの道へと巣立ちます。この冊子を通して、芸術教育学科49名の学生たちの鼓動を感じ取っていただき、更なる熱いエールをお送りいただければ幸いです。

芸術教育学科主任  
中島 千絵

## GRADUATION PROJECTS 2021

### 玉川大学 芸術学部 芸術教育学科 卒業プロジェクト2021

#### 作品展（美術・工芸コース）

日時 2021年2月24～26日 11:00～17:00

会場 玉川大学STREAM Hall 2019 5階オープンスペース  
(玉川大学芸術学部 卒業プロジェクト展 THE MEDIA GARDEN内)

#### 論文発表会

日時 2021年3月4日 11:00開演

会場 玉川大学ユニバーシティコンサートホール2016(UCH)106教室

#### 演奏会（音楽コース）

日時 2021年3月4日 プログラムA 13:00開演

2021年3月5日 プログラムB 13:00開演

会場 玉川大学ユニバーシティコンサートホール2016(UCH)マーブルホール

# FOREWORD

ご挨拶

# PRESENTATIONS

作品展 / 論文発表会 / 演奏会



# MUSIC

音楽コース

## 震災における支援方法の検討 — キリスト教と「音楽の力」に期待される心理的ケア —

本論文は、日本における震災について、キリスト教の宗教者が、支援者としてどのような役割を果たすことができるか、どのような音楽的支援が可能であるか、という2点を明らかにすることを目的している。筆者自身はクリスチャンではないため、いわゆる無宗教と呼ばれるような日本人の立場として論文を展開していく。

筆者は、玉川大学でリベラルアーツ学部の青野和彦先生による宗教的人間研究の授業において、キリスト教の死生観について学んだ。そこで、キリスト教徒が被災した日本人を支援するにあたって起こりうる問題点や難しさとは何なのか。支援者としてのクリスチャンは、震災でどのような役割を果たすことができるのか疑問に思い、このテーマを設定した。

研究の方法としては、島田裕巳氏や佐藤優氏などの宗教学者らによる関連書籍や、中村美垂氏による『東日本大震災をめぐる「音楽の力」の諸相—未来の文化政策とアートマネジメントのための研究1』等の先

行研究を参考とした。阪神・淡路大震災や東日本大震災などの過去に発生した震災については、神戸新聞NEXTによる『データでみる阪神・淡路大震災』など、インターネットから参照できる数々の記事を閲覧し、データを収集した。

本論の展開としては、まず第1章で過去に発生した震災の中から、阪神・淡路大震災と東日本大震災を中心に取り上げ、その震災の特徴や概要を振り返った。

次に第2章、第3章では、キリスト教と日本の宗教観についてそれぞれ調査し、支援者側であるキリスト教の宗教者と、被災者側である日本人との間にどのような宗教違いにおける意識の違いが表れるかを明らかにした。

第4章に関しては、震災における「音楽の力」とはどのようなものかについてや、具体的な支援例を調査し、震災で音楽がどのような役割を果たす事ができるかを明らかにした。

最後の章では、第2章、第3章で宗教観を比較することによって明らかとなったキリ

スト教と日本人の意識の違いや、第4章で明らかとなった震災における音楽の力から、改めてキリスト教が震災においてどのような役割を果たすことができるかということについて導き出した。

現在、コロナウイルスによって社会全体が様々な側面から大打撃を受けている様子は、震災によって被災地が受けた状況とも重なる。本研究によって、人が人を「支援する」ことの難しさについても考えるきっかけとなることを願っている。

森 胡桃

Mori Kurumi



トロンボーン

副演奏

### 〈メロディアスエチュード 第2曲〉 J. ロッシュ 作曲

《メロディアスエチュード》は、イタリアのテノール歌手であり、声楽教師としても高い功績を持っているマルコ・ボルドーニ(1789-1856)の声楽のための練習曲を、ジョーンズ・ロッシュ(1881-1952)がトロンボーン用の練習曲として編曲した作品である。

日本では音楽大学の入学試験としても扱われており、世界中で多くの奏者に愛されている。

エチュードは、日本語では「練習曲」と訳されている。いわゆる「曲」と大きく異なるのは、「練習曲」の名通り「何かの練習に特化している点」である。その点にお

いて《メロディアスエチュード》は「歌う」ことの訓練を目的とした内容となっており、全120曲中の第2曲にあたる本作品は、スラーの練習に特化されている。たっぷり息を使って吹く、滑らかなメロディをお楽しみいただきたい。

# TROMBONE

## 《映像》第1集より 〈水の反映〉

C. ドビュッシー 作曲

C. ドビュッシー (1862-1918) の《映像》第1集〈水の反映〉(1905) は、同年の交響詩《海》の完成後の作品である。ラヴェル作曲の《水の戯れ》の影響を受けた曲として知られている。

この曲は、二長調8分の4拍子で書かれ、部分と部分を繋ぐカデンツのような動きを奏した後、32分音符と64分音符によるパッセージが続き、きらきらとした水の反射を思わせる。中間部では、その速さを増し、華やかに盛り上がった後には左手から右手に交差するようなパッセージが続く。終結部では、それまでの動きとは対照的に、穏やかな4分音符がアルペジオによって奏でられ、低音部を伴ったハーモニーが次第に遠のくように曲を閉じる。水に映る影を、繊細な表現とともにアンダンティーノ・モルトで美しく奏でられる。

## 赤堀文香

Akahori Fumika



## 小学校教育におけるサウンドスケープ ― 音楽による低学年の授業考察 ―

現在、我々の身のまわりには、様々なジャンルの音楽で溢れている。中には、音楽とは異なるジャンルとして考えられてきたサウンドスケープ、すなわち音風景がある。これは、音楽を考えていく以前に、「音」について気付かせてくれる重要な役割がある。その「音」をあえて意識的に聴くことで、人間に本来備わっている本能や感性を育み、豊かにすることができるのではないか。

そのために、「音」をどのようにして楽しむのか、また、小学校教育にてどのようにサウンドスケープを取り入れた授業ができるのか。以上に視点を当て、サウンドスケープは、

専門の今田匡彦やマリー・シェーファーの文献を中心に、サウンドスケープを取り入れた授業を考察する。

サウンドスケープが、音楽と異なるジャンルとして考えられた要因として、「音楽=西洋の芸術音楽」という考え方が浸透していたことにある。つまり、音楽ではなく環境音と位置付けられていた。音楽科の目標である豊かな感性を育むには、西洋芸術音楽を学ぶだけでなく、日常生活における環境音に多く触れることが、人間が生まれもつ感性に気付くために大変重要だということを意識すべきだろう。

また、音楽として考えられなかったサウンドスケープは、

アフォーダンス理論の視点から、人間は自分が興味をもっている音楽に関しては意識できるが、そうでない音楽は他者からの刺激がない限りほぼ意識できない、という無意識の識別をしている。

これらの研究から、小学校教育におけるサウンドスケープを取り入れた活動は、身のまわりの音に耳を傾けることを中心として、感受性を育てることが大切だと分かった。この活動により、将来あってほしい音を想像し、豊かに生きる世界を創造するべく、自身がどう感じ、なぜそう感じたのかを考える授業研究を行った。

## ピアノ・ソナタ《1905年10月1日の街角で》変ホ短調

L. ヤナーチェク 作曲

レオシュ・ヤナーチェク (1854-1928) はチェコ共和国の作曲家である。ピアノ・ソナタ《1905年10月1日の街角で》変ホ短調 (1905) は、チェコのブルノで起きた事件を題材にして書かれた。ドイツ系市民と地元チェコ人との抗争を鎮圧するために出動した軍隊により、デモに参加していたチェコ人の青年が射殺されてしまった。

当初は3楽章からなる作品だったが、初演直前に最終楽章が焼き捨てられてしまった。作品は〈予感〉と〈死〉の2楽章構成である。第1楽章のオスティナートが楽曲全体を支配し、第2楽章ではそのオスティナートが核となっている。第1楽章では、激しくドラマティックな様子を、第2楽章は、争いが沈んだような静けさを表現したい。

## 浅野沙綾

Asano Saaya



## 主体的・対話的で深い学びを取り入れた中学校音楽科鑑賞教育の授業提案 ― KH Coderを用いたワークシートの用語分析 ―

本論文は、中学校音楽科における「主体的・対話的で深い学びを取り入れた鑑賞」の授業提案を行うものである。

現在、教育現場では「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業改善していこうとする教育改革が行われており、実際に教育実習で取り入れ、鑑賞教育の難しさを痛感した。そこで本研究では、「主体的・対話的で深い学び」を取り入れた鑑賞教育の有用性を明らかにし、教育実習で行ったベートーヴェン作曲《交響曲第5番ハ短調作品67》についての授業改善を、ワークシートの用語分析を

ともに、雅楽《越天楽》の授業提案をした。

第1章では、「主体的・対話的で深い学び」を取り入れた授業実践例をもとに、「主体的・対話的で深い学び」を有効活用するための方法について述べた。

第2章では、教育実習先の中学生が記入したワークシートの用語をKH Coder(文章型データを統計学的に分析するソフトウェア)を用いて分析し、授業時間の設定や適切な声かけのタイミング等、授業改善を提案した。

第3章では、第2章の分析結果や月刊誌『教育音楽 中学・高校版』をもとに雅楽《越天楽》の授業提案をした。

主体的・対話的で深い学びを取り入れた鑑賞の授業では、グループ活動の時間設定、生徒が自分の意見をもつための工夫、適切な発問が大切であると示された。日々の授業で、知覚と感受の結び付き、教師が言葉を仕掛けて生徒に考えさせ、意見を共有すること、授業の発問と予測される生徒の答えをあらかじめ準備しておくことが重要だと考えられる。この研究を、4月より教員として指導に生かし、雅楽《越天楽》の授業実践をしたい。新たな課題を発見し、これからもより良い授業を創っていくことが、今後の課題である。

# TRUMPET

## 〈トランペットとピアノのためのアンダンテとアレグロ〉

J. G. ロパルツ 作曲

トランペット

《トランペットとピアノのためのアンダンテとアレグロ》は、フランスの作曲家ジョセフ・ギィ・ロパルツ(1864-1955)の作品で1899年に作られた。

曲名の通り、アンダンテとアレグロの2部構成になっている。冒頭部分アンダンテは少しもの悲しげな雰囲気があり、ため息を表すような音型が多く見られ、重みのある音を柔らかく豊かに表現することが特徴的である。対照的にアレグロは、トランペット特有の華やかな音色が活かされた、スピード感のあるパッセージが特徴的である。ピウ・ラルガメンテでたっぷり大きく、アレグロで軽快なファンファーレを華やかに輝かせながら、最後のクライマックスへと勢いよく向かっていく。

### 荒井菜摘

Arai Natsumi



## 小学校での吹奏楽指導における基礎力の養成 — 中学校・高校へと繋げていくための指導法 —

本論文は、小学校吹奏楽においての基礎的な指導方法やその在り方について論じるものである。小学校の吹奏楽の現状は、楽器に初めて触れる児童が多く、吹くことに精一杯であり、中学生や高校生に比べて身体が小さく、学力や身体の発達も未熟なため、いかに分かりやすく基本的な内容を児童たちに教えるかが重要と考えられる。

本論文では、中学校・高校へとつなげていくための小学校における吹奏楽の指導法について、基本的な奏法の指導をはじめ、児童たちに合わせた練習内容や指

導方法を考え、吹奏楽の楽しさを伝えることを目的に、アンケート・インタビュー調査や先行研究をもとに考察した。

第1章では、小学校での吹奏楽指導の現状について考察した。楽しく活動できるようにすると同時に、子供たち一人一人を把握して、レベルや状態に合わせながら、無理のないように指導することの必要性が明らかになった。第2章では、基本的な奏法の習得について考察した。指導していく上で、どのような練習方法を用いれば児童たちを楽しませながら基礎力を身につけられるか

について言及した。第3章では、合奏は全員で合わせるものであることを意識させた上で、楽しみながら一緒に音楽づくりを行うことが重要であると明らかになった。

今回の研究では、音を出すために意識することや合奏する際のポイントなどを明確にした。基礎的な奏法の習得に加え、楽器を演奏する楽しさ、仲間と演奏できる喜びを教える必要があることを明らかにした。児童たちに吹奏楽の面白さを伝えることが、中学校・高校も吹奏楽を続けたいという児童が増えていくことにつながっていくであろう。

# SINGING

声楽

## 〈ストルネッロ〉

G. ヴェルディ 作曲

## 〈エイシスとガラテア〉より ガラテアのアリア〈山鳩が恋の嘆きを小枝の上で語るように〉

G. F. ヘンデル 作曲

ヴェルディ(1813-1901)の《ストルネッロ》(1869)は、彼の歌曲の中では比較的後期の作品である。1869年に友人の台本作家ピアール・ヴェグが急病にかかり、その救済の資金集めのために書かれたとされている。ストルネッロとは、ある種のイタリア民謡詞の形態のことで、他にもレスピーギやチマラーなど多くの作曲家が、このタイトルで歌曲を書いている。

《エイシスとガラテア》は、ヘンデル(1685-1759)が作曲した牧歌劇である。もともと、私的に上演する仮面劇として1718年ごろに作曲されたが、現在では2幕ものの英語オペラとして上演されることが多い。〈山鳩が恋の嘆きを小枝の上で語るように〉は、ガラテアがエイシスに対する恋心の哀楽を歌ったアリアである。

### 伊藤麗良

Ito Reira



## 中学校における生徒指導 — 校内合唱コンクールの有効利用 —

本論文は、中学校の教育活動上重要な合唱コンクールを通し、その生徒指導への活用を提唱し、方法について考察を行ったものである。執筆のきっかけは、教育実習の経験から、自身が生徒指導を十分に行えなかったこと、合唱コンクールの練習が主だったことから、合唱練習を生徒指導に生かすことは出来ないかと考えたことからである。

合唱コンクールは、クラス全体で行う行事であり、生徒一人ひとりと関わることが出来るため、生徒指導を行う場として適することを実感した。また、実習中、教員の日々の多忙を目の当たりにするとともに、生徒と十分に関わる

時間が取れずに悩んでいる状況を知ることとなった。実際、筆者も、授業準備やワークシートのコメント作成に時間を取られ、生徒と関わる時間が取れず、生徒指導の実態を知ると共に、実施してゆく上での難しさを痛感した。そこで、しっかり生徒と関わることが出来、クラスが協力し高め合いながら、成長できる場である合唱コンクールに着目することで、この課題に取り組めないかと思うに至った。その方法を、3章に分けて述べた。

第1章では、生徒指導とはなにかについて理解を深め、生徒指導の在り方について述べた。また、中学校での生

徒指導の実態を調べ、そこから考えられる課題について述べた。第2章では前章を通して知ることが出来た課題を、合唱コンクールを通すことで解決できないかを考えつつ、クラス練習における担任の関わり方についても考察を行った。第3章では、実際に合唱コンクールを運営する音楽科教員の役割と、担任への働きかけについて述べた。

本論文は、実際に学校現場で有効であるかどうか検証する機会を得ることが出来なかったため、自身が教壇に立った暁には、さらに検証を重ね、改善し、完成させていきたい。

副論文

副論文

# SINGING

声楽

## 〈霧と話した〉

中田喜直 作曲

## 歌劇〈トゥーランドット〉から カラフの Aria 〈誰も寝てはならぬ〉

G. プッチーニ 作曲

1 曲目の《霧と話した》(1960)の歌詞は、3 連にわかれている。1 連の終わりりと 2 連の始まり、2 連の終わりりと 3 連の始まりは、同じ歌詞が繰り返されている。これは、歌詞意味を強調するための手法である。観客に繰り返されている歌詞を意識する意思を明確にすることができるのではないかと考える。

2 曲目の〈誰も寝てはならぬ〉(1924)は、歌劇《トゥーランドット》第 3 幕で、カラフによって歌われる Aria である。トゥーランドット姫が自国の国民に対して名を解き明かすまでは寝てはならない御触れを出す。もし誰も解き明かせなかったら、国民を皆殺しにすると言う。これに対して、カラフは、勝利への思いとトゥーランドット姫への愛を歌い上げる有名な Aria である。この曲を歌っている多くのテノール歌手のように堂々と歌いあげたい。

## 岩淵洋平

Iwabuchi Youhei



## 小学校歌唱共通教材の学びが将来に残るための歌唱指導法 — 小学生と大学生へのアンケートから —

筆者は、学習指導要領および歌唱共通教材について学修する中で、なぜその選曲が行われたか、選ばれた曲は学校現場において実施されているのか、児童生徒の学びとして残っているのかということに疑問に思った。そこで、どのようにしたら歌唱共通教材の学びが定着し、その後、我が国で親しまれてきた唱歌や童謡、わらべうた等を、子どもからお年寄りまで世代を超えて共有できるようになるのかを、研究した。

第 1 章では、文部科学省による小学校の歌唱共通教材の全 8 曲を、曲ごとに内容を分析し、指導のポイントを述べた。

第 2 章では、先行研究をもとに、質問紙調査実施した。対象は、小学生(6年生)と大学生(4年生)で、歌唱共通教材を記憶として残しているかどうかを、歌うことができるのみならず、曲名や歌詞について質問をした。結果としては、「歌唱共通教材を記憶として残している」という回答が少ないことがわかった。理由として小学校で習った以降に曲にふれる機会がない、授業での記憶があまりないことがあげられる。

第 3 章では、児童の音楽に対する向き合い方と、歌唱共通教材の意義の達成がアンケートで比例していないことが、残念であると感じたため、調査結果をもとに、記憶に残

る授業をするために、「行事」や「風景」を意識した授業を提案した。

歌唱指導として、小学生の歌うことが「楽しい」と感じる、「音楽の授業が好きだ」という気持ちを学びとして残すことができるよう、教師が工夫をすることが大切であると考えられる。小学生で習った後にその曲にふれることが少なくなり、せっかく習ったことを忘れてしまうのである。学校教師の授業の工夫、その後の学習として、生涯、歌唱共通教材にふれる機会を大切に、歌唱共通教材についての学びを定着することを考えていきたい。

## 協奏曲第 1 番

A. K. レベデフ 作曲

作曲者の A. K. レベデフ(1924-1993)はロシアのチューバ奏者、教育者、作曲家である。彼は、亡くなった 5 年後の 1998 年に、チューバの発展に尽力したとして、世界チューバ協会から表彰された。

チューバの重く、物悲しいメロディからはじまり、中間部では情緒的な Andante cantabile や、チューバの腕の見せ所ともいえる Allegro が奏され、最後は国王が堂々と歩く姿を思わせる Maestoso で締めくくられる。どの場面もチューバの重く豊かな響きが活かされている楽曲である。途中、フランクのヴァイオリン・ソナタ第 4 楽章冒頭に似た旋律も登場する。

ぜひチューバの温かく豊かな響きや音楽をお楽しみください。

# TUBA

チューバ

## 宇佐美喬平

Usami Kyohei



## 小学校におけるスクールバンドの問題点と指導法の提案 — 指導教員のアンケート調査から —

本論文のテーマは「小学校におけるスクールバンドの問題点と指導法の提案—指導教員のアンケート調査から—」である。筆者は音楽教育を専攻する中で、器楽を通して音楽を学んだ。また、小学校の金管バンドの活動にも関わってきた。その活動をしていく中で、児童への奏法へ関する指導方法についての疑問を感じたことが本研究に至った背景である。

本研究では、小学校におけるスクールバンドの現状や問題点を浮き彫りにし、児童に楽器の基礎的な奏法を身に付けながら演奏することの楽しさを感じさせる指導方

法と、スクールバンドの存在意義を明らかにすることが目的である。研究方法として実際に教育現場への指導で経験したことから現状や問題点を提示し、川崎市内の 6 校の指導教員にとったアンケートを通して考察し、参考文献を元に研究を行った。

第 1 章では、筆者の実体験を元に小学校におけるスクールバンドの現状や指導上の問題点を明らかにした。

第 2 章では、第 1 章第 1 節で取り上げた児童の奏法習得における現状や問題点についての解決方法として、4 つの指導方法を明らかにした。

第 3 章では第 1 章第 2 節で取り上げた合奏時に見られる問題点についての解決方法として、2 つの指導方針を明らかにした。

結論として、小学校におけるスクールバンドは、管打楽器を音楽の授業以外の場で他者と演奏し音楽を創り上げていく活動を通して、児童の音楽を愛好する心情を育て、教員との信頼関係を築きあげていくことで心の教育に繋がる。そして、児童の豊かな感性や集中力、協調性、自己表現力の育成を図ることができ、児童の人生をより豊かで幸せなものにすることができることが明らかになった。

副論文

副論文



# SINGING

オペラ《ドン・パスクワレ》より ノリーナの aria 《騎士はあのまなざしを》  
G. ドニゼッティ 作曲

声楽

ドニゼッティ (1797-1848) により作曲された《騎士はあのまなざしを》は、オペラ《ドン・パスクワレ》の中で、ノリーナ (ソプラノ) が最初の登場シーンで歌う楽曲である。

このオペラは、19世紀初めのローマが舞台となっている。この aria を歌うノリーナは物語の中で、主人公ドン・パスクワレの知人の妹に成りすまし、裕福な老人であるドン・パスクワレを騙し、結婚をする。お金遣いも荒く、自尊心が強い女性というキャラクターである。

この aria を歌う登場シーンでは、恋愛の本を読みながら「私だって心を誘惑する方法をたくさん知っているわ」と歌う。ノリーナの性格がよく表れた、明るく楽しい曲となっている。

## 遠藤杏唯

Endo Ayu



### 音楽が人にもたらす効果 — 音楽療法と音楽心理学の視点から —

日常の中に、音や音楽はあふれている。人々は無意識に音と関わり、時には感情を揺さぶられることもある。本研究では、音や音楽が人間に与える影響はどのようなものなのか、また、その影響をどのように活用していく必要があるのかについて明らかにした。

具体的には、書籍やインターネット情報より音楽療法と音楽心理学について詳しく研究し、人間と音楽の関係について探った。さらに、作業中の音楽鑑賞や嫌悪感を抱く音についてのアンケートを取り、音に対する人間の心理について調査をした。

アンケート結果からは、勉強や作業など集中したい時に音楽を聴く人が多いということがわかった。また、嫌いな音には黒板を引っ掻く音など、特定のものが取り上げられる傾向があった。

その中で、作業中に聴かれることの多い心地の良い音楽と言われるものには、「1/fゆらぎ」が使われていること、音楽を形作る要素の違いから感情に働きかける効果も変化する、ということが明らかとなった。

また、音楽療法と音楽心理学のそれぞれの効果や活用法、関係について述べた。似て非なる領域であるが、

対象や目的が異なることが判明した。

音楽には、言語には不可能な感情に直接語りかける不思議な力がある。曲を聴いただけで、思い出が蘇ることや、情景を思い出し、感情が込み上がることもある。音楽が多様化し、音楽に恵まれているこの時代だからこそ、音楽療法や音楽心理学が、これからさらに活用されていくと筆者は考える。筆者自身これから関わっていく教育の現場や社会の中で、今後も人と音楽の結びつきについて研究をしていきたい。

# PIANO

スケルツォ 第4番 ホ長調 Op.54  
F. ショパン 作曲

ピアノ

F. ショパン (1810-1849) は、生涯で4曲のスケルツォを残している。スケルツォとはイタリア語で「冗談」や「滑稽」を意味し、「諧謔曲」とも訳される舞曲である。

スケルツォ第4番 (1842) は、ショパンの円熟期の作品である。全4曲の中で唯一、長調の作品であり、明るく軽快な曲想が特徴的である。「諧謔曲」という、本来のスケルツォの概念に最も近い作品と言えるだろう。

構成は、典型的な三部形式となっており、主部は軽やかな和音と細かいパッセージが繰り返し表現されている。中間部は曲想が一変し、物憂げな旋律が歌われる。再現部では主部の旋律が厚みを増して再現され、技巧的で華々しいコーダで幕を閉じる。

## 大瀧まどか

Otaki Madoka



### 別室登校生徒に対する心を癒やす音楽活動の提案 — 音楽療法士へのインタビュー調査から —

本論文は、不登校支援の一つの方法である「別室登校」に焦点を当て、別室登校生徒の心を癒やすために、音楽を取り入れた新たな活動を提案することを目的とした。

別室登校とは、登校しているが自分の教室へは入らず、保健室や教室以外の「学習室」で過ごす形態を意味する。他方、全国の小・中学校における不登校児童生徒数は増加傾向にある。その背景には、いじめや学力不振等が挙げられる。また、SNSやインターネットの普及によるコミュニケーションの希薄化が進んでいることも、要因のひとつである。筆者は、別室登校生徒と関わる中

で、音楽を用いて生徒の心を癒やすことができないかと考え、本研究に至った。

具体的な研究の方法は、様々な文献や統計資料から、不登校及び別室登校の現状を明らかにし、先行研究より適応指導教室での音楽活動の取り組みと事例を研究する。その上で、音楽療法士にインタビューを実施し、音楽療法の視点を交えながら、心を癒やす音楽活動を導いた。

研究の結果、別室登校生徒の活動のひとつとして、音楽活動が有用であるという結論に達した。実際に試みた

ところ、音楽療法の視点を交えることで、音楽のもつ、人の心を癒やす作用を効果的に取り入れることができた。また、別室登校は不登校傾向にある生徒の居場所として、必要不可欠な場であることも明らかとなった。生徒一人ひとりと丁寧に向き合い、音楽活動をきっかけとして、生徒が抱える不安や悩みを少しずつ解決していくことができるよう願う。

今後は、実際に別室登校生徒と音楽活動を継続的にを行い、生徒にどのような影響をもたらすのかを実践的に研究していきたい。

副論文

副論文

## ピアノ・ソナタ 第3番 短調 Op.58より 第4楽章

F. ショパン 作曲

ピアノ・ソナタ 第3番 短調 Op.58より 第4楽章は、F. ショパン(1810-1848)が1844年に作曲し、1845年に出版された作品である。

ショパンは、ポーランドの前期ロマン派音楽を代表する作曲家であり、ピアノの詩人と呼ばれた。この楽章は、重厚さを持った短い序奏に続いて、風雲急を告げるような情熱的な楽想を持ったロンド主題が出てくる。前の楽章の、穏やかで幸福な冗長さをぎゅっと引き締めるようなムードがある。8分の6拍子の推進力のあるリズムに乗って出てくるロンド主題は、再現されるたびに段々と音量を増して、華麗になっていく。情熱的なロンド主題は、堂々とした副主題や急速なパッセージを挟みながら、繰り返されるたびに激しさを増していき、このソナタを締めくくるにふさわしい。

## 岡田 董鈴

Okada Sumire



## 『美女と野獣』の映像と音楽について — アニメ版と実写版の比較 —

本稿は、ディズニー映画『美女と野獣』を通して、映像や音楽の素晴らしさや魅力を、アニメ版と実写版の違いに触れながら論じた。研究動機としては、ディズニー作品の中で最も関心がある『美女と野獣』の作品を用いて、映像と音楽について深めていきたいと考えたからである。とりわけ映像と音楽にこだわりが強い『美女と野獣』を題材とし、アニメ版と実写版の比較をテーマとし、研究をした。研究方法としては、『美女と野獣』のアニメ版と実写版それぞれのストーリーをDVDで視聴し、使われている映像表現や音楽表現の相違を分析

し、比較研究する。

第1章では、『美女と野獣』の作品とストーリーについて論じた。

第2章では、『美女と野獣』についてアニメと実写の比較を、DVDを用いて分析した。これによって、アニメ版と実写版についての違いが明らかになった。

第3章では、一般的な視聴者の意見を集約したかったため、『美女と野獣』についての魅力をアニメ版と実写版を比較しながら、アンケートをとることで、より研究を深めた。

以上の研究を通じて、『美女と野獣』は、アニメ版も実写版もどちらも魅力的であり、それぞれの良さがあるということが分析から読み取れた。アニメ版では、登場人物の心情が曲や映像から読み取りやすく、観ている者にそれが直接的に伝わることが、アンケート結果からも読み取れた。実写版では、映像や音楽といったところで魅力であると感じる人が多かったことから、音楽や映像の重なりがベストマッチして、この作品の奥深さを示している。

## 〈ベルガマスク組曲〉より 第1曲〈プレリュード〉

C. ドビュッシー 作曲

ドビュッシー(1862-1918)は、フランスの作曲家で「ピアノの画家」と言われている。《ベルガマスク組曲》は、1890年頃に作曲された初期作品で、第1曲〈前奏曲〉第2曲〈メヌエット〉第3曲〈月の光〉第4曲〈バスビエ〉の4曲から構成されている。「ベルガマスク」というタイトルの由来は、イタリア留学中にベルガモ地方を訪れた際に、舞曲「ベルガマスク」に影響を受けたという説がある。

第1曲〈プレリュード〉は、強い低音から始まり、水が流れるような滑らかなフレーズが特徴的である。鍵盤を端から端まで使ったダイナミックさの中にも細かく繊細な音が流れる哀愁漂う曲である。演奏するにあたり、ペダルを踏み替えるタイミングに気をつけ、力強さと滑らかさのメリハリをしっかりとつけて表現したい。

## 葛西 友美

Kasai Yumi



## 中学校における吹奏楽のあり方と指導 — 効率の良い部活動づくり —

日本の吹奏楽は、年々盛んになってきていて、技術が上がり、生涯愛されるものとなっている。しかし、教師の労働時間の問題や専門の指導者が学校によって足りていないことから、部活は地域で行うべきとの声も出てきている。そのため、学校で部活を行うことのメリットを見出し、どうあるべきかを研究した。

アンケートを元に、部活動での良かった点、悪かった点、コンクールについてなど、1から見直しをした。アンケート結果を分析した上で、本来、学校現場での吹奏楽はどうあるべきなのか、何を学ばせたいかを考察した。そし

て練習日程、練習内容を考え、より良い吹奏楽のあり方を提案した。

本研究で、技術向上には初心者のグループの向上が大切だとわかった。そのためにも、基礎練習を重点的に行ったり、部活内で教え合い、全員で上手くなっていくという関係性をつくって行ったりすることが大切だ。

また、アンケートから「効率の良い練習方法」「技術指導の改善」「人間関係の形成」の3つの課題が見つかった。それに対して、学校だけでなく地域やボランティアなどの力を借りて技術向上を図ること、生徒主体に物事を考え、解

決していく習慣を身につけること、毎月、目標と振り返りを行ったり、レクリエーションなどで交流を深めて行ったりするなど解決案を提案した。

本来、吹奏楽部では、楽器が上手くなることだけでなく、音楽を通して伝えられるメッセージ性や自分を音で表現できる良さを知ることが目的である。吹奏楽を通して多くの人と出会い、音楽と深く向き合っていってほしい。筆者が教員になった際、顧問中心の部活動ではなく、生徒主体を目指して役割分担や話し合いをしっかりとしていきたい。そして、生徒との信頼関係を形成し、部活動を運営したい。

# TRUMPET

トランペット

トランペット協奏曲 変ホ長調

J. B. G. ネルーダ 作曲

チェコの作曲家、ヨハン・バプティスト・ゲオルク・ネルーダ(1711-1776)のトランペット協奏曲。この楽曲の原曲は、コルノ・ダ・カッチャ協奏曲といい、コルノ・ダ・カッチャというホルンの先祖の楽器で演奏される曲であった。この古楽器の音色や音域は、現在のトランペットと似ているため、ほとんどがトランペットで演奏される曲となった。

第1楽章アレグロでは、16分音符の軽快なパッセージと、スラーを用いた滑らかなパッセージが組み合わさった、美しいメロディが特徴の三部形式の曲である。第2楽章ラルゴは、第1楽章と対照的にゆったりとした曲調であり、3連符やシンコペーションが効果的に取り入れられた、不規則ながら美しいメロディが特徴である。

梶 野々香

Kaji Nonoka



## 中学校の歌唱指導における音程が合わせられない生徒への指導法

本論文の目的は、中学校の生徒の実態を把握し、さまざまな生徒にあった指導方法を考察することである。歌うことに対するコンプレックスは、義務教育時の音楽教師によってもたらされる危険性があり、音楽教師は音楽の授業で適切な歌唱の指導を行うことで、歌うことに苦手意識をもつ生徒を少なくすることができる可能性をもつ。こうした観点から、中学校の歌唱指導に焦点を当て考察した。

第1章では、音程が合わせられない原因を歌がうまく歌えない3つのタイプに分け、それぞれの特徴を整理した。

第2章において、中学校における歌唱指導では、変声期

の生徒に対する心理的・音域的、音量的な配慮が必要であることが明らかになった。また、音楽関係の習い事を経験している生徒は、歌うことに苦手意識をもたない傾向にあることから、音楽の授業においては音楽に触れる時間を多く確保することが重要であることが明示された。

第3章では、第1章のタイプごとに、指導方法を考察し、聴き取り苦手タイプでは、音取り・発声練習の工夫の方法、リズム苦手タイプでは、リズム練習、創作活動におけるリズムの扱い等の工夫、発声苦手タイプでは、発声練習の工夫、鑑賞活動での変声期や声の扱いについて提示した。学習

指導要領の音楽の4分野のうち、4分野すべての指導が、歌唱指導につながるということが明らかになった。

以上の結果から、中学校の歌唱指導は4分野すべてにおいて、音楽に触れる時間を多く確保し、歌唱指導を計画的に取り入れることが効果的であると考えられる。また、同じ指導方法が生徒全員に効果をもたらすのではなく、生徒に応じて効果的な指導方法が異なっていた。音楽の授業での観察や歌唱の実技テストにおいて、生徒一人ひとりの歌唱の特徴やクラスの特徴を見出し、第3章の指導方法をもとにして効果的な指導法を取り入れることが求められよう。

# SINGING

声楽

〈薔薇〉

F. P. トスティ 作曲

歌劇〈ラ・ボエーム〉より ロドルフォのアリア〈冷たき手を〉

G. プッチーニ 作曲

1曲目の《薔薇》(1885)は、イタリアの作曲家トスティ(1846-1916)が作曲した。彼は、イタリアがオペラ全盛であったにも関わらず、美しい旋律の歌曲を数多く残している。この曲も、美しく流れるような前奏によって、繊細で優しい旋律が導き出されている。

2曲目の《ラ・ボエーム》(1895)は、イタリア・オペラの代表とも言えるプッチーニ(1858-1924)によって作曲された。《ラ・ボエーム》の舞台は、1830年代のパリで、屋根裏部屋でその日暮らしをしている4人の芸術家の卵と2人の娘との愛と悲しみの話である。〈冷たき手を〉は、屋根裏部屋でミミの落とした鍵を探すうちに、ロドルフォとミミの手が触れ、ロドルフォがミミに思いを打ち明ける、テノール・アリアの中でも人気の高い曲である。

片倉将亮

Katakura Masaaki



## 児童生徒のための歌唱指導の研究 ― 指導者としての工夫を考える ―

歌を歌うことが好きな人がいる一方で、歌うことが苦手・嫌いという人がいることも事実である。特に、小中学校の音楽の授業において、歌うことが嫌いだったという人は多いはずだろう。本論文では、音楽の授業や歌う時に、楽しく、気持ちよく自分の声を出すための、効果的な歌唱指導・方法について考察した。

第1章では、小中学校の授業において歌が嫌いと思ってしまう要因について、児童生徒からの視点と授業者からの視点について探った。

第2章では、実際の学校現場においての授業の実態を

把握し、歌唱授業についての工夫を考えるため、事例研究を行った。事例は、教育実習における授業見学と、研究授業からわかったことをまとめた。

第3章では、どのようにしたら子供達が気持ちよく声を出し、楽しんで歌うための環境を作ることができるのか。指導者はどのような点に工夫をして指導をすることが大切なのか、ということ以下の2つの視点で考察した。

1つ目は、児童生徒とのコミュニケーションを取ることで、心と体を解放させ、声を出せるという環境を作っていくことが大切だと考えられる。

2つ目は、綺麗に声を出すことへの意識を持つことである。その際、恥ずかしがらずに自分の声を出すことや、自然で無理のない歌声を出すこと、のびやかに歌声を出していることの3点について考察した。

本研究によって、児童生徒が歌を好きになるために指導者が工夫すべき一番大切なことは、児童生徒とのコミュニケーションだということがわかった。日常の生活の中から、児童生徒とのコミュニケーションを密接に行うことを大切に、音楽の授業だけでなく、学校生活において子供達にどのようなメリットがあるのかを研究していきたい。

副論文

副論文

# PIANO

ピアノ

## ポロネーズ第6番《英雄》変イ長調 Op.53

F. ショパン 作曲

F. ショパン(1810-1849)のポロネーズ第6番 変イ長調 Op.53は、1842年に作曲された作品である。一般に《英雄ポロネーズ》の名で親しまれている。ポロネーズとはフランス語で「ポーランド風」の意味を表わし、「ポーランドの舞曲」のことである。

4分の3拍子のこの曲の構成は複合三部形式である。堂々とした序奏で始まり、高らかにポロネーズの主題が登場する。途中、短調の部分が出てくるが、すぐにポロネーズの主題が戻ってくる。中間部はアルペジオ風に弾かれる和音の連続で始まる。伴奏部分は下行していく音を執拗に繰り返し、これが次第に高潮していく。一変して、流れるような右手の旋律が哀愁を呼び起こした後、ポロネーズ主題が戻り、最後は力強いコーダで全曲が結ばれる。

## 官野菜摘

Kanno Natsumi



## 映画における劇伴音楽の効果に見る鑑賞教育教材への提案 — パイレーツ・オブ・カリビアンを題材に —

本論文は、映画における劇伴音楽の効果を検討することで、中学校・高校の音楽科における鑑賞教育教材への提案を行うことを目的とする。

今回、題材としてディズニー映画の『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズを取り上げる。研究は、オーケストラのためのメドレー楽譜をもとに行った。

3作品に登場する楽曲の分析では、それぞれの楽曲の主題を譜例とともに提示し、それらが視聴者に何を感ぜさせるか、何を思わせるかを推測した。異なる曲同士でも同じ主題を持つ曲があったり、同じ曲の中でも全

く違う主題を併せ持つ曲があったり、非常に興味深いことがわかった。

シリーズ3作品を通して同じ主題を持つ楽曲を比較し、そこから考察を行うことで、楽曲が表す物語の背景や、物語そのものをより深く理解することができることがわかった。

鑑賞教育において、映画を用いて音楽鑑賞を行うことは、生徒の興味関心を引くだけでなく、物語の新たな側面を見出すことにも繋がる。曲ごとの主題を探し、その主題を比較することで、曲想の違いがわかるように

なり、面白さを感じられる。また、音楽の良さを味わい、自分の感想や考えを述べるができるようになる。さらに、映画作品をより深く理解することができるようになる、と考える。

中学校・高校の鑑賞教育では、クラシック音楽や民族音楽、伝統芸能を取り上げることが多い。それらに加えて、映画をはじめとする大衆的な作品を題材にし、鑑賞することをより身近に感じてもらえるようになってほしい。今後、中学校・高校の鑑賞教育の題材として取り上げられることを期待する。

# SINGING

声楽

## 《アドリアナ・ルクヴルール》アドリアーナの aria 《私はおとなしい下僕》

F. チレーア 作曲

## 《蝶々夫人》蝶々夫人の aria 《ある晴れた日に》

G. プッチーニ 作曲

《私はおとなしい下僕》(1902)は、F. チレーア(1866-1950)作曲のオペラ《アドリアナ・ルクヴルール》の第1幕で歌われるアドリアーナの aria である。コメディ・フランセーズの花形女優であるアドリアーナは、舞台裏で今晩演じるセリフの稽古をしている。見かけた公爵と修道院長がアドリアーナに対して称賛の声をあげる。しかし、アドリアーナは、「私は、神の下僕にすぎません」と謙遜し、歌われる。

《ある晴れた日に》(1901-1903)は、G. プッチーニ(1858-1924)作曲のオペラ《蝶々夫人》の第2幕で歌われる蝶々夫人の aria である。アメリカ海軍ピンカートンの現地妻として結婚し、彼の「コマドリが巣をつくる頃に戻る」という言葉を信じ待ち続けている。ピンカートンが自分の元に戻ることを夢見て歌われる。

## 菊井もも

Kikui Momo



## 中学校音楽科における《蝶々夫人》を教材とした主体的鑑賞授業の提案

中学校音楽科における鑑賞の授業を振り返ると、映像を観るだけであったり、テストのために知識を学ぶものであることが多く、生徒たちが受動的になりやすく、教員自身も、鑑賞の授業には難しさを感じているという実態を知った。そこで本論文では、教材をオペラに限定し、主体的鑑賞授業の提案を行った。

具体的には、学習指導要領を読み解くことから、鑑賞の授業において求められていることを明らかにし、そこから鑑賞教材のオペラについて調べることからその適性を批判した。さらに、より指導に適したオペラを教材として授

業提案を行うことにより、主体的な鑑賞の授業を行う指導方法を明らかにした。本論では《アイダ》と《蝶々夫人》を取り上げ、特に生徒にとって親近感や興味を抱かせやすい題材である、日本が舞台となった《蝶々夫人》を中心に展開を行った。

鑑賞の授業では生徒たちをどのように活動させるべきかを考え、授業を行うことが重要である。学習指導要領で求められている言語活動を行う上で、「知覚・感受を行う過程」を重視するには、生徒たちの思考の過程を残す工夫や、教員自身がその教材の魅力を的確に伝えられるよ

う教材研究を深く行う必要がある。

また、プロの演奏に触れる機会や、生徒らが実践する機会を提供するなど、実体験から、より音楽や芸術の素晴らしさを感じることができるよう工夫するなど、生徒たちの興味・関心を促し、生徒が主体的に学習に取り組むことができる授業を確立することが肝要であると結論付けた。

鑑賞の授業は、見ることや聴くことが中心となる領域であるため、どうしても教員の一方通行になりやすい。いかに考えさせ、感ぜさせるかがキーポイントとなろう。今後も模索を続け、よりよい授業作りを追求していきたい。

# PIANO

ピアノ

## 《アレグロ・アパッショナート》嬰ハ短調 Op.70

C. C. サン＝サーンス 作曲

サン＝サーンス(1835-1921)の《アレグロ・アパッショナート》(1884)は、コンクールのための曲として作曲された。嬰ハ短調で始まり、嬰ハ長調で終わる、ソナタ形式の要素を持つ複合三部形式である。冒頭序奏において力強いユニゾンによって演奏される Fis-Gis-His の音型が主要動機となり、7小節目からの第1主題は軽やかに演奏される。第1主題の短い変奏の後、第2の叙情的な主題が現れる。ダブル・バーから始まるアレグロにおいては主要動機を元に展開され、コーダは長調で華々しく締め括られる。

一曲の短い時間で、リズムの処理やアルペッジョ、異なる楽想の弾き分けなどのテクニックが要求される。曲の根底に一貫して流れる8分の6拍子を感じながら、変化をいきいきと表現していきたい。

## 桑折友理恵

Kuwaori Yurie



## 音楽が人間に及ぼす影響 — カフェにおけるBGMの活用 —

現在、音楽はありとあらゆる所に溢れていて、私たち人間は無意識に色々な音楽を聴いている。また、多くの店舗でBGMは使用されているが、これらの音楽は人間にどのような影響を与えているのか、BGMは本当に効果があるのか疑問を抱いた。そこでカフェのBGMに焦点を置き、BGMは本当に必要なかを研究した。

はじめに、音楽的心理学、空間音楽、カフェなど飲食店のBGMについて、文献研究を行った。音楽やそれに含まれるリズムやテンポによって、人間の感情は変化し、気分に影響を及ぼすということが明らかになった。

次に、実際にカフェの店内BGMについて、電話やメールでお客様コールセンターに問合せをし、実地調査を行った。その結果、独自のデジタルコンテンツを開発していたり、毎月楽曲リストをHPで公開したり、楽曲リストをメールで送付したりなどのサービスがあったりした。また、季節や時期、時間によってBGMを変えていたり、オリジナルのテーマソングを作っているというように、各店舗で様々な工夫がなされていた。

筆者は、カフェの利用者にアンケート調査を行った。その結果、カフェを選ぶ理由としては、BGMはあまり重

要視されていなかった。しかし、BGMは「必要である」という人がほとんどで、普段BGMは大きな要素ではないが、無くなると「落ち着かない」などの意見が多くあった。つまり、多くの人間にとってカフェにおいて店内BGMは必要とされているということが分かった。

BGMにおける音楽の活用は、店舗にとっては雰囲気作りの重要な要素であり、利用者にとっては気分を変える重要な要素である。よって、音楽は我々人間に大きな影響を与えており、人間にとってなくてはならない存在である。

# SINGING

声楽

## 演奏会用アリア《すてきな春に》

小林秀雄 作曲

## 歌劇《トスカ》より トスカのアリア《歌に生き、恋に生き》

G. プッチーニ 作曲

《すてきな春に》(1972)は、峯陽(1932-)が作詞、小林秀雄(1931-2017)が作曲した歌曲である。演奏会用アリアとして作曲されたこの曲は、恋の予感やときめきのレチタティーヴォから始まり、春の訪れとともに恋の喜びを歌い上げるアリアへと続いていく。

《歌に生き、恋に生き》(1900年初演)はG. プッチーニ(1858-1924)が作曲したオペラである。舞台は1800年のローマ。画家のカヴァラドッシは脱獄した旧友のアンジェロツェティを匿った罪で処刑されてしまいそうになる。恋人を殺されたくなければ自分の女になれと迫るスカルピアに追い詰められ、トスカが歌うのがこのアリアである。イエスに歌を捧げ、惨めな人には愛を捧げてきたのに、なぜこんな報いを受けなければいけないのか、と憂いて歌われる。

## 古賀春菜

Koga Haruna



## 通常学級におけるインクルーシブ教育 — 共生社会を目指す音楽教育 —

平成24(2012)年7月、中央教育審議会初等中等教育分科会特別支援教育のあり方に関する特別委員会は、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進(報告)」のなかで、「共生社会の形成に向けて、障害者の権利に関する条約に基づくインクルーシブ教育システムの理念が重要であり、その構築のため、特別支援教育を着実に進めていく必要があると考える」と示した。現在、通常学級に在籍する特別な支援を有する児童生徒の割合は増加傾向にあるという現状があり、通

常学級におけるインクルーシブ教育の必要性が高まっている。

本論文では、「インクルーシブ教育システム」とは、「障害の有無に関わらず、共に学び合うことのできる仕組み」と定義し、教育ユニバーサルデザインと学級経営の2点を方策の軸に、授業提案を行った。

第1章では、インクルーシブ教育システムについての定義と実態や、通常学級の現状を明らかにした。

第2章では、通常学級で行うインクルーシブ教育をユニバーサルデザインと学級経営の視点から考察し、

その重要性についてまとめた。

第3章では、音楽の授業におけるインクルーシブ教育の提案を行った。

今回の研究を通して、インクルーシブ教育を実践するにあたって、ユニバーサルデザインの可能性とその弊害について考察することが出来た。この研究を活かして、障害の有無に関わらず、児童生徒が互いに尊重しあえる学級を作り、ゆくゆくは社会の一員として共生社会を築いていける人材を育てたい。

副論文

副論文

# PIANO

ピアノ

## 《2つのラプソディ》Op.79より 第1番 口短調

J. ブラームス 作曲

ブラームス(1833-1848)は北ドイツのハンブルクで生まれた。この《2つのラプソディ》はブラームスが46歳の時、1879年に作曲された。また、ブラームスが最も心を許したと言われる弟子、エリーザベト・フォン・シュトックハウゼン(1847-1891)に献呈されている。本作品は、ブラームスのピアノ作品の中でも広く親しまれており、演奏会等でもよく取り上げられている。

今回演奏する第1番口短調は、堂々と力強く始まり、跳躍が多く、低音から高音まで幅広く用いられている。これを聴いたブラームスの友人から「天空を駆け巡る若きヨハネス」と称されたという逸話もあるように、激しく情感を沸き立たせる作品となっている。

### 佐藤真紀乃

Sato Makino



## 小学校高学年の「生活や社会における音楽の意味や役割」に関する音楽づくりの授業研究

本論文は、中学校学習指導要領における「生活や社会における音楽の意味や役割」を考察し、小学校高学年の授業づくりに活かすことを目的としたものである。この論文を通し、音楽をさらに身近に感じられるような授業づくりと、その上で身近な音を活用した音楽づくりをすることを目的とした学習指導案を作成した。

第1章では、学習指導要領の内容から、本研究の意義について記した。

第2章では、「生活や社会における音楽」として身の回りの音楽、サウンドスケープ、ミュージックソムリエについ

て取り上げ、それぞれの存在が授業づくりにどのように活かされていくのかを記した。

第3章では、これまでに記述してきたことを元に、実際に授業を行うことができるよう、小学校5年生を対象とした学習指導案、ワークシートを作成した。授業の最終的なねらいとしては、生活や社会の中に存在する音や音楽の存在に気付くこと、さらにそれを活用した音楽をグループで作成し、発表した上で、我々の生活にある音楽の存在価値、自分にとっての音楽の役割について、自分の言葉で説明できるようになることである。

我々の生活や社会の中に溢れる音楽の存在を認識し、その役割を考えることで、音楽の授業をより楽しく身近なものに感じるだけでなく、音楽によって生活の中の音や音の文化について考え、豊かな感性を育むことができる。

今後の課題として、小学校と中学校との連携が重要だろう。近年では、文部科学省でも年々推進されている小中一貫教育等、小学校と中学校の連携を図ることができると期待される。これらの取り組みを上手く活用し、各学年、各校種ごとに連携した学習の場を設定することで、円滑な学校経営、授業計画を取り入れていきたい。

# TRUMPET

トランペット

## 《トランペット・ソナタ》

P. ヒンデミット 作曲

《トランペット・ソナタ》は、ドイツの作曲家パウル・ヒンデミット(1895-1963)によって、1939年に作曲され、今もなお多くのトランペット奏者に親しまれている。ヒンデミットは、現代音楽と、バロックや古典時代の音楽の両方を取り入れ、無調性対位法の手法を用いた20世紀を代表する作曲家である。

《トランペット・ソナタ》は、3部形式で構成されている。第1楽章は、力強く、彼らしい音形や和声が多く表れている。第2楽章は、一変して軽やかに弾むような雰囲気がある。そして第3楽章は、非常に厳かで重々しい葬送曲である。最後はバッハの讃美歌《すべての人は死ななければならない》で締めくくられる。

本日は、第2楽章と第1楽章を演奏いたします。

### 篠塚 唯

Shinozuka Yui



## 中学校吹奏楽部指導についての提案 — 現場アンケート調査及び現状課題報告を踏まえて —

本論文では、中学校吹奏楽部の現状と課題を踏まえ、その改善にあたる今後の吹奏楽部の在り方を検討する。働き方改革の推進により、中学校を中心とした部活動も、これまで以上に顧問の長時間勤務等を考慮した改革の動きが出ている。筆者は吹奏楽経験があり、こうした状況の中、吹奏楽部顧問がどのように部活動指導を行っているのか興味を持ち、本テーマを設定した。

本論文では、働き方改革によって、練習時間が十分に確保できていない場合がある、中学校吹奏楽部の現状をアンケート調査によって浮き彫りにし、現状に則した指

導マニュアル例を作成し、指導指針の提案を行った。研究方法として、筆者の教育実習校と母校でのアンケート調査や、文献調査を行い、現状を明らかにした。

第1章では、2校へのアンケート調査から、活動時間や部員数の少なさ、顧問と外部講師の方針の違いに関する課題が見られた。第2章では、文献調査から、「生涯にわたり芸術文化等の活動に親しむ基礎を形成する」という本来の文化部活動の意義とはずれた組織体制による、部活動運営の課題が見られた。

本研究から、課題の改善に向けては、部活動が学校教

育の一環であるという認識を、生徒や保護者、指導者を含む学校全体に改めて浸透させるべきであることが明示された。他方、部活動としては、意見共有の場を定期的に作ることで、部活動に関わる者が一貫した方向性で活動できるようにすることも重要である。そして、生徒が指導者からの助言やサポートを受け入れる環境を持ち合わせつつ、生徒主体で活動できる体制を整えていく必要がある。音楽や文化面での教育的効果を図るという本来の吹奏楽部の在り方を確立させていくことで、生徒が充実した学校生活を過ごしていくことを期待したい。

副論文

副論文

# SINGING

歌劇《イル・トロヴァーレ》より レオノーラのアリア 〈静かな夜〉

G. ヴェルディ 作曲

声楽

《歌をください》

中田喜直 作曲



歌劇《イル・トロヴァーレ》よりレオノーラのアリア〈静かな夜〉は、ジュゼッペ・ヴェルディ(1842-1893)によって、作曲されたオペラである。第一幕で歌われるこの曲は、レオノーラが騎士であり吟遊詩人のマンリーコへの愛を歌ったアリアで、「彼のために生きられないなら、私は死ぬだろう!」と歌う。

《歌をください》は、渡辺達生の詩、中田喜直(1923-2000)作曲の歌曲である。中田喜直は、戦後の日本で、親しみやすい歌曲や童謡、合唱曲を多く作った作曲家である。この曲は晩年に手がけた歌曲で、人生への思い出と感謝を歌った感慨深い歌曲である。前半の「歌をください」という強いメッセージと、後半の切ない美しいメロディを歌い分けて、この曲を表現したい。

進藤香菜子

Shindo Kanako



## The Beatlesが音楽で世界に与えた影響

The Beatlesは、デビューから60余年、今もなお、様々な場面で曲が流れ、世界中のアーティストにカバーされ、美術展や映画が上映されるほど、世界中で愛されている。どこか懐かしく、そして色あせない新鮮な音楽は、生でその音楽を聴いていた世代だけでなく、現代の若者をも虜にしている。

本稿では、彼らはなぜ、そこまで様々な世代に愛されているのか、具体的にどのような影響を世界の人々に与えたのかについて、解明していく。

第1章では、The Beatlesのメンバーについてと、グ

ループがどのように成り立ったのかを述べる。

第2章では、彼らのアルバムとともに、収録曲とアルバムの特徴について分析した。

第3章では、彼らが音楽文化に与えた影響、イギリス・アメリカに与えた影響、日本に与えた影響について文献を参照し、具体的にまとめた。

彼らは、ロック・ミュージックは芸術的でないという偏見を無くし、黒人音楽を再評価して楽曲を工夫した。

また、分業体制が当たり前だったこれまでの音楽制度の概念を打ち破り、新たな音楽ビジネスを確立した。

そして、労働者階級を全面に出すことで、イギリスの階層固定社会を緩和したことを述べた。

それにより、今なお世界中の人々の心に届く曲を数多く残し、世界中から愛され、崇拜され、尊敬されるグループとして、名前を残しているのではないだろうか。

# PIANO

《無言歌集》第4巻

Op.53-5 〈民謡〉第2巻 Op.30-6 〈ヴェネツィアの舟歌〉第5巻 Op.62-6 〈春の歌〉

ピアノ

J. L. F. メンデルスゾーン・バルトルディ 作曲



《無言歌集》は、ドイツ語では“Lieder ohne Worte”(言葉のない歌)である。歌詞はないが歌いたくなるような旋律とそれにふさわしい伴奏がついた曲である。

〈民謡〉(1841)は、舞踊風の部分と民謡風な部分が交互に登場し、舞踊風の部分は少しずつ変化していき、民謡風の部分は徐々に厚みを増していく。最後は人々が遠ざかるように曲が終焉を迎える。

〈ヴェネツィアの舟歌〉(作曲年不明)は、流れるような旋律ではあるが、波のない場所に孤立してしまったかのような静かに落ち着いている顔も持っている。しっとりと落ち着いて表現することが重要だ。

〈春の歌〉(1842)は、標題を付けなかったという曲である。装飾音を叙情的な旋律の表現に可愛らしく付随させ繊細に演奏したい。

鈴木佑依

Suzuki Yui



## 大学生の「好きな曲」と歌詞の関係について

— アンケート調査から考える —

筆者は、大学生の好きな曲には、歌詞がついているから、じっくり歌詞を考えながら聴くのではないかと、仮説を立て研究した。

レコード大賞を受賞した曲をもとに、これまでの流行した歌詞について調べた結果、時代によって聴き手のニーズに合わせ、歌詞も変化することがわかった。

大学生を対象にしたアンケート調査を集計した結果、歌詞の持つ衝撃的な単語だけで人は曲を好きになるのではなく、大半の理由として、リズムやメロディ、歌手などといった要素も含めたものが「好きな曲」の理由であると

ということがわかった。

「好きな曲」の一番の理由として多く挙げられたのは、「曲調」や「グループ・歌手の存在」であった。つまり、歌詞は「好きな曲」の一要素というだけで、「好きな曲」の一番の理由ではないようだ。

さらに、歌詞に共感する人が多いことから、筆者は「好きな曲」の要素の一つとして、共感する歌詞があると結論づけた。共感性を重視する理由として、歌詞理解のために疑似体験できることが必要だと考えた。谷口論文では「大学生は、音楽を聞き流している」と記述されていたが、

「歌詞を根拠とする『好きな曲』があり、様々な思いを持って聴いている」という筆者の仮説は、以上のように立証された。

歌詞の内容だけでなく、歌詞の持つ意味や語感が音やリズムに乗るから、歌詞に共感できるのであり、「好きな曲」は人の心に響き、それがどのような歌詞であろうがメロディであろうが、曲として好きなのである。時代によって歌詞での言葉の表現が変わることから、歌詞が時代を表すこともある。プラスの言葉で表された歌詞を持った曲が増え、それが誰かの「好きな曲」になればいい。

副論文

副論文

# PIANO

ピアノ

## 〈24の前奏曲〉第5番 〈24の前奏曲〉第10番

N. G. カプースチン 作曲

カプースチン(1937-2020)は、7歳の時からクラシックをモスクワ音楽院で学んだ。音楽院在学中にラジオ放送「ボイス・オブ・アメリカ」で聴いたジャズに興味を持ち、そこから独自のアイディアに基づいて作曲を試みるようになった。そのため、第5番(1988)、第10番(1988)両方ともジャズとクラシックを融合させた、独特の作風を感じることができる。カプースチンは、年代的には「現代」に区別されるが、実験的な挑戦を試みる楽曲は無く、あくまで聴き手を意識した作曲になっている。

第5番は、夜にお酒を飲んで聴きたくするような、どこことなくモダンジャズのな雰囲気を感じる秀作である。また、彼が優れたピアニストであったことから、第10番は高度な演奏技術が求められる曲であり、演奏会向きと言えるであろう。

## 須藤拓哉

Sudo Takuya



## パンクロックが及ぼした社会影響

筆者は現在、プログレッシブロックの音楽活動を行なっている。数々のロック、ポップスジャンルに触れてきたが、その中でも一番最初にロックの魅力を教えてくれたアーティストが、パンク界のレジェンド「グリーンデイ」だ。筆者が影響を受けたパンクミュージックの現代の姿について研究したいと思い、このタイトルにした。

音楽は日々進化する。時代の流れとともに、新たな音楽が生まれ進化を続けている。ただ同時に、死にゆく音楽も存在する。1970'sに大ブームを引き起こしたパンクミュージック。もう現代では聞くことができなくなってしまった。

パンクの精神そのものが廃れてきたのだ。

そもそもパンクとは音楽のジャンルではない。パンクとは、上記のように、音楽における精神性の名称である。社会に対する反体制的、または左翼的なメッセージを歌い、その音楽や歌詞が反宗教的と捉えられることもある。

パンクミュージックには特徴がある。まず先程述べた歌詞の内容。そして曲が主に3コードで成り立っていることが多い。パンクに音楽理論や技術は必要ない。怒りと、それをぶち当てるのにギターやマイクを使うだけだ。さらに、パンクロックは曲だけが文化ではない。ファッション、ダンス、

アート、文学、様々な面で多大な影響を残した。

それにも関わらず、現代ではこうした攻撃的な音楽を聴衆が求めなくなってきた。国や社会、政治家に対するミュージシャン達のヘイトは、一体どこへ行ってしまったのか。

筆者はその理由を、電子機器の進歩にあると考えた。時代の進化で消えていく音楽。

新しい音楽が生まれ、時代に合わないものは消える。だが、その繰り返しなのである。パッパも、当時ではロックだったはずだ。こうして、また新しいパンクの姿が次世代で現れることを祈りたい。

# TROMBONE

トロンボーン

## 〈ラメント〉

S. A. グバイドゥーリナ 作曲

作曲者グバイドゥーリナ(1931-)は、ソビエト連邦のタタール自治共和国出身の現代音楽の作曲家であり、宗教や神秘主義に影響を受けた一人である。この曲の《ラメント》(1977)とは、嘆き悲しむという意味である。作中には、ため息をつくような半音と、幅の大きな強弱で表したメロディが多く並んでいる。一方で、速度を上げながら音が上行していくメロディは、怒りを表しているようである。また、中盤の3連符が頻出する場面では、落ち着きを取り戻したようにも聴こえる。これらの怒りと悲しみが交互に出てくることで、感情の揺れ動きが感じられる。この曲の最大の特徴とも言える急激な強弱の変化が、ラメントをよく表している。

## 関口詩織

Sekiguchi Shiori



## 小学校音楽科の歌唱指導における課題の抽出と改善策

近年、グローバル化や人工知能などの技術革新が進み、新たな時代に対応できる人材が求められている。そのような社会で、音楽教育も児童の将来を見据えた教育が求められている。そこで、音楽教育では、どのような歌唱指導がより良い指導となり得るのか、具体的な指導方法を明らかにした。

第1章では、筆者の経験やアンケート結果から、児童の実態や課題を抽出した。器楽の授業や、歌唱共通教材などの有名な曲、歌詞や曲想を考える活動が楽しかった、という意見が多く聞かれた。このようなことから、楽

しみながら音楽を身近に感じられる授業展開が必要だと明らかにした。第2章では、学習指導要領の要点をまとめ、課題を明確にした。目標を達成するには、児童が楽しんで音楽活動を行うことが大切だと考えられる。そのため、曲を楽しむための最低限の知識や表したい表現の実現のための技術を身につけること、思いや意図を実現するために授業展開を工夫すること、イメージを表現する方法を工夫することなどが必要だと明らかになった。第3章では、それらの課題の改善策と学習指導案を提示した。改善策として、基礎の指導をしっかりと

こと、良い声のイメージを明確に持つこと、イメージを様々な手段で表すことなどが挙げられる。改善策から《春がきた》を想定した授業の展開を提示した。

小学校の音楽科の授業を通して、児童が音楽の楽しさを学び、これからの人生の中で音楽により困難を乗り越えたり、物事に挑戦したりする力を育むことが、児童の将来を豊かにするために教員に求められている。しかし、現在の日本の教育では、教師の多忙化が問題視されている。教師がどの教科も深く理解するためにはどうしたらよいかを説明することが今後の課題である。

副論文

副論文



# SINGING

歌劇《ラ・ファボオリータ》より レオノーラのアリア〈いとしいフェルナンドよ〉  
G. ドニゼッティ 作曲

声楽

G. ドニゼッティ (1797-1848) 作曲のオペラ《ラ・ファヴォリータ》のファヴォリータとは、「国王の愛人」のことである。このオペラの主な舞台は、中世末期のスペインの「宮廷と修道院」である。レオノーラは国王の愛人であるにもかかわらず、フェルナンド(修道士)を愛してしまう。フェルナンドは愛するレオノーラのために、父親の「跡を継いでほしい」という気持ちに反抗し、出世を誓う。一方レオノーラは、自分が国王の愛人だということを、後ろめたさからフェルナンドに告げることが出来ない。

〈いとしいフェルナンドよ〉は、レオノーラがフェルナンドと結婚できると喜びつつも、国王の愛人だったことを知られることに不安を募らせる場面で歌われる。

## 早乙女佳那

Sotome Kana



## 中学校の合唱コンクールにおける生徒指導について

合唱コンクールは、中学校行事の中でとても大きい役割を担っている。教育実習先では、生徒、学級担任が一丸となって練習に取り組んでいた。その際、合唱コンクールへの取り組みで起こりうる学級の問題や、合唱を通しての指導、音楽教師と学級担任の連携などが気になった。これらを研究するために、文献を読み、現場で起こっている問題やそれらの解決方法、指導する際に意識していること、教師間のやりとりなどを研究した。

本論文では、生徒指導の中の学校行事の役割、担任と音楽教師の役割を述べている。合唱コンクールの生徒指導に

おいて特に大切なのは、学級全体で取り組み集団としての活動をさせること、生徒一人一人が活躍する場を作ることである。担任において大切なのは、学級の様子を把握し声掛けをすること、結果よりも過程を重視することである。担任は、一人一人に適した声掛けをし、問題が起きた場合には解決していかなければならない。また、練習過程で達成できる目標を決め、このクラスで合唱ができてよかったと思う気持ちや、お互い頑張ったという讃え合えるような気持ちを生徒たちにもたせなければならない。

音楽教師において大切なのは、生徒の技術向上に努め、

担任と連携することである。合唱コンクールは学級主体の行事のため、担任を中心に進めていくが、技術面では音楽科の教師がしっかりと指導しなければ合唱が成り立たない。よって、担任と密に連絡を取り、音楽の授業で解決したい課題を明確にしていく必要がある。

現在は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、ハミングを用いる合唱やマスクを着用しての合唱が学校で行われている。十分に歌えない場合や声を出すことが難しい状況での合唱コンクールの代用はなにが適切であるか、音楽科の教師として考えていくことが今後の課題である。

# TRUMPET

トランペット

トランペット協奏曲  
A. アルチュニアン 作曲

アレクサンドル・アルチュニアン(1920-2012)は、旧ソ連、アルメニアの作曲家である。トランペット協奏曲は、1950年にティモフェイ・ドクシツェルのために作曲され、トランペット奏者にとって定番のレパートリーとして演奏される作品である。第1楽章のAndante Allegro energizingは、力強い前奏から細かいパッセージのフレーズの変化、繊細かつ熱情的な旋律の表現に、アルメニアとロシアの民族性を感じられる。第2楽章のMeno Mossoでは、カップミュートを用いた虚ろな旋律が特徴的である。第3楽章のTempo Iは、快活なテンポへと戻り、最後はカデンツァで華やかに終わる。アルメニアの民族的で叙情的な美しさを繊細に引き出しつつ、トランペットの荘厳な音色を楽しんでいただけるように演奏いたします。

## 千葉佳祐

Chiba Keisuke



## 中学校音楽科における武満徹 —《ノヴェンバー・ステップス》から考える新しい教材—

本論文のテーマは、中学校音楽科における武満徹を《ノヴェンバー・ステップス》を用いて考え、現代音楽や音楽の可能性について触れる教材である。

筆者は、今までの音楽経験の中で現代曲に触れることが多く、なぜこのような難解な作品を作曲するのか疑問に感じていた。その中で、《ノヴェンバー・ステップス》が中学生の教科書に掲載されていることを知り、中学生にも面白さ、魅力が伝わるようにしたいと、このテーマを設定した。

本研究では、西洋と和が融合したこの作品を、武満徹はどのような経緯で作曲しようと考えたのか。ニューヨー

クをはじめとする各国での評判はどのようなものであったのか、この作品の魅力とは何かを考察した。

研究方法は、主に武満に関する著書から当たった。第1章では、武満の生涯と創作した作品について取り上げ、武満の音楽との出会いや年代による作風の変化について明らかにした。第2章では、小澤征爾から見た武満の音楽観と、武満の日本音楽の捉え方を取り上げた。第3章では、《ノヴェンバー・ステップス》について取り扱った。初演の各国の批評や、初演に携わった琵琶・尺八奏者の話から、作品の魅力について検討した。第4章では、中学

校教科書の《ノヴェンバー・ステップス》の内容に触れた。そこから、筆者が考えた指導観・題材観を元に、授業を組み立てる提案を行った。

結論として、《ノヴェンバー・ステップス》の教材化では、西洋と日本の対比を元に授業を組み立てると良いのではないかと、という提案に至った。本研究では、武満徹の生涯や音楽の特徴を捉え、《ノヴェンバー・ステップス》に焦点を当てて作品の魅力を明らかにした。それらを踏まえたことで、武満の作品の面白さを中学生に知ってもらい、身近に感じてもらえれば幸いである。

副論文

副論文

# SINGING

声楽

## 〈かごかき〉

貴志康一 作曲

## 〈君を愛す〉

L. v. ベートーヴェン 作曲

## 〈メサイア〉より

第10曲〈見よ、闇が地をおおう〉、第11曲〈闇の中を歩む民は大いなる光を見た〉

G. F. ヘンデル 作曲

《メサイア》(1741)はG. F. ヘンデル(1685-1759)がイギリスに帰化した後に手がけた、英語で歌われるオラトリオである。救世主を意味する題名の通り、イエス・キリストの生涯を題材に独唱、重唱、合唱で構成されている。合唱の中でも第2部最終曲〈ハレルヤ〉は特に有名で、日本でもたびたび上演される。

今回歌う第10曲及び第11曲は、世界が暗黒に覆われても、人々の上で輝く主の光を手に入れることを歌っている。特に第11曲の臨時記号を多く含んだメロディは、暗黒の不安定さや不気味さを醸し出している。それと対照的に、光を見た部分は、繰り返し高らかに、華々しく歌われる。暗黒と光の部分との対照的なメロディが印象深い楽曲であり表現し分けることを演奏の目標にしたい。



堤 尚人

Tsutsumi Naoto

## ゲーム音楽にライトモチーフを使用する演出効果について

ゲーム音楽は、ゲームを盛り上げる要素としてだけでなく、近年では音楽単体としても注目されている。多様化するゲーム音楽の中でも、特に演出面において大きな効果あげていると考えられるライトモチーフを使用した楽曲に焦点を当て、ゲームにとっての音楽の紅葉を探った。方法としてはまだまだ開発半ばと言わざるおえないゲーム音楽に関する先行研究を参考にし、ゲーム音楽の歴史、種類、役割についてまとめ、実際にゲームに用いられる楽曲を分析することによって、その効果と重要性、さらにはより効果的な使用方法について考察を行った。

ゲーム音楽の歴史はゲーム機の発展と関係しており、本論では大手ゲーム製作会社の任天堂とソニーをピックアップし、1980年代から2000年代までの機体および発音性能の発展をまとめた。ゲーム音楽には、SE、ME、BGMと大きく分けて3種類あり、それぞれに役割があるが、一般的にはBGMを指す。ゲームの場面に合わせて様々な音楽が変化していくことを「インタラクティブ・ミュージック」と呼び、場面に合う「適切さ」が重要とされている。

本論で筆者が注目したライトモチーフは、19世紀末に確立されたクラシック音楽に見られる作曲法で、ワーグ

ナーの楽曲に散見される。この作曲法を用いた楽曲がゲーム音楽でどのような効果を発揮しているのかを『ドラゴンクエストVI』と『キングダムハーツ シリーズ』の楽曲から分析した。ゲーム音楽は映像の補助的側面が強いため、楽曲全てにこのような作曲法は必要とされないが、プレイヤーに、より強いメッセージを届ける方法として効果的である。

今後もゲーム音楽は、新たなゲームの開発に伴い発展を重ねていこう。より精巧な音源や新たな音楽ジャンルの獲得など、展望、可能性についても触れまとめた。

# PIANO

ピアノ

ピアノ・ソナタ第8番〈悲愴〉ハ短調 作品13より 第1楽章

L. v. ベートーヴェン 作曲

L. v. ベートーヴェン(1770-1827)が作曲した、ピアノ・ソナタ第8番《悲愴》ハ短調 作品13(1798-1799)は、オーケストレーションを想像させる序奏を持つソナタ形式の楽曲である。展開部やコーダへのつなぎの部分では、序奏のフレーズが用いられ、そのフレーズを経て次の部分へと移り変わっていくという特徴がある。

第1楽章はハ短調から始まる。第1主題はトレモロの伴奏に合わせて躍動感のある主題が展開される。第2主題は変ホ短調に転調し、四分音符の伴奏形を持つ緊張感のある主題が展開される。提示部の反復が終わると、ト短調での序奏のフレーズを経て展開部へと繋がり、再現部はハ短調に戻り、序奏のフレーズを用いた短いコーダによって、力強く終結する。



中川 歩海

Nakagawa Ayumi

## 小学校の教育や学級活動におけるリトミックの指導法の考察

リトミックの指導を受けたことにより、音楽をより感覚的に感じ取る力や、音楽を平面的ではなく立体的に捉える力が身につけていると感じたことから、その効果や活動内容、効果的な指導方法について詳しく研究した。本論文ではエミール・ジャック＝ダルクローズ(1865—1950)が考案したリトミックの指導法を元に、小学校で実践可能な指導方法について考察、提案した。

第1章では、リトミックの活動内容や、その目的と効果について解説した。

第2章では、小学校における学習指導要領や教科書

から見るリトミックについて研究、考察した。

第3章では、国立音楽大学の音楽学部音楽文化教育学科での井上恵理先生のリトミック指導および、筆者の通う音楽教室でのリトミック指導と指導体験について述べた。

第4章では、小学校6年間を通したリトミックの指導計画モデルを提案した。さらにその中から、第2学年の音楽科、他科目との関わりとして第5学年の体育科の学習指導案を提案した。さらに継続的にリトミックを取り入れるために、学級活動での取り入れについて提案

した。

本研究では、リトミックにより感覚的に音楽の諸要素を知覚感受できることを再認識し、子供達が主体的、積極的に表現活動に取り組むことができると結論づけた。

リトミックの指導法については、楽器や歌唱が得意でなくても自分の体を使って指導ができるという点において音楽を不得意とする教員でも指導しやすいと考える。今後公立の小中学校の教員研修で取り上げられ、児童たちにとってリトミックがより身近なものとなることを期待したい。

副論文

副論文

# SINGING

歌劇《仮面舞踏会》より オスカルのアリア〈浅黒い顔で星を仰ぎ〉

G. ヴェルディ 作曲

声楽

歌劇《カプレーティ家とモンテッキ家》より ジュリエッタのアリア〈おお、幾たびか〉

V. ベッリーニ 作曲

中吉 姫佳

Nakayoshi Himeka



1曲目の〈浅黒い顔で星を仰ぎ〉(1859)は、ヴェルディ(1813-1901)のオペラ《仮面舞踏会》の第1幕で歌われる。ボストンの総督であるリッカルドのもとに、判事が人の心を惑わせる占い師ウルリカの追放を求めに来る。このアリアは、ウルリカと仲の良い小姓のオスカルが、彼女の追放を弁護して歌う曲である。

2曲目の〈おお、幾たびか〉(1830)は、ベッリーニ(1801-1835)のオペラ《カプレーティ家とモンテッキ家》の第2幕で歌われる。愛し合っているジュリエッタとロメオの両家は敵対しているため、ジュリエッタは従兄弟のテバルドと婚約させられてしまう。このアリアは、ジュリエッタが実らぬ恋に嘆き、悲しんで歌う曲である。

## 音楽を聴いて美しいと感じる人間の感情 — ショパンとドビュッシーにおける美の追求 —

本論文では、音楽を聴いて美しいと感じる人間の感情について、ショパンとドビュッシーを例に挙げて研究を行った。人はなぜ音楽を聴いて様々な感情を抱くのか、筆者は「美しい」と感じる人間の内面に焦点を置き、どのような曲を聴いて「美しい」と感じるのか考察した。

考察した曲は、ショパンのエチュード作品10-3《別れの曲》とドビュッシーの《ベルガマスク組曲》から第1曲〈月の光〉である。

第1章では、美しいと感じる人間の感情を探り、美の概念と音楽と情緒の関係について述べ、第2章では、楽

曲分析を行った。楽曲分析を行なった2曲は世の中で一般的に美しいと言われている作品であり、筆者も実際に美しいと感じた。

研究の結果、明らかとなったのは2点である。1つ目は、曲を聴いて感じる思いは人それぞれ違い、受け取り方も違うということである。つまり、曲を聴いて感じる心情は、聴き手の環境や心境にも大きく関係すると考える。育った環境、出会った出来事によって曲を聴いた時に人間の感情は変わっていくことが明らかとなった。

2つ目は、同じような環境で、観たり、聴いたりをする

と、その時の気持ちを共有できることがわかった。つまり、多くの人が同様の感情を持つこともあるということだ。ゆえに、音楽は聴く行為としての「聴覚的」なこと以外にも、「視覚的」に映像などを見る行為で、我々の心に影響を与える事もわかった。つまり見て、聴いて、触って、嗅いで、味わうという五感を通して感じ、発揮されるということなのだろう。

そして最終的に、美の定義は感覚的、感情的な価値の双方が相まって生まれ、自分自身が素直に感じたものを美しいとすれば良いのではないかと結論に至った。

# SINGING

〈郷愁〉

P. チマーラ 作曲

声楽

歌劇《ラ・ボエーム》より ミミのアリア〈私の名前はミミ〉

G. プッチーニ 作曲

逸見 江莉佳

Hemmi Erika



1曲目の《Nostalgia》(1914)は、イタリアの作曲家チマーラ(1887-1967)によって作曲された。この曲は《郷愁》という曲名だが、故郷のことを懐かしむのではなく、昔好きだった人への思いを哀愁漂う伴奏と旋律によって表現されている。

2曲目の歌劇《ラ・ボエーム》(1895)は、イタリア・オペラの作曲家プッチーニ(1858-1924)によって作曲された。屋根裏部屋でその日その日を自由に過ごす4人の男と2人の娘の、愛と悲しみの物語が描かれている。ロドルフォがミミに思いを打ち明けるアリアの最後で、「今度はあなたの名前を教えてくださいませんか?」と言われ、ミミが自己紹介をするアリアが、〈私の名前はミミ〉である。舞台背景の12月の寒い日に、2人の小さな恋の燈が灯る、温かな場面が想像できる。

## 「暗譜力」に関する一考察 — 聴覚情報と視覚情報に着目して —

筆者は3歳からピアノを習っていたのにも関わらず、大学進学まで楽譜が読めなかった。しかし、「楽譜が読めない」ことで困ったり、不便に感じたりしたことがなかった。それには、暗譜力が優れていたことが関係している。本論文では、「暗譜する」とは一体どのようなことなのかを、聴覚情報と視覚情報に着目し、暗譜力が優れていることはどんな場面で役立つのかを明らかにすることを目的とする。

第1章では、暗譜するということはどういうことなのかを、絶対音感、耳コピ演奏(楽譜を用いず耳だけで聴

き取って再現演奏すること)、初見演奏との関係性に着目し、筆者の経験を混じえて考えた。

第2章では、耳コピにおける聴覚的イメージの確立と、読譜における視覚情報の処理について考察し、わかったことをまとめた。

第3章では、実際に暗譜力を身につけるためにはどうしたら良いかを、2つの点において考察した。1点目は、スキーマと呼ばれる人間の知識構造の基本単位についてである。2点目は、音楽を聴くことに着目し、イメージをもちながら感覚的に聴くことと、楽曲構造を分

析し、理論的に考えながら聴いていくことである。暗譜力を身につけると、環境に左右されることなく演奏に集中することができる。例えば、照明が暗く楽譜が見づらい場所が挙げられる。また、「目」を楽譜に使わない分、「耳」を敏感に広くつかうことができることや、伴奏者としてピアノを演奏する際は、読譜に気を取られず歌い手の歌い方や表現に集中することができる点がメリットとして考えられる。今後は、第3章で示された2点について筆者自身が実践してみたり、先行研究を探したりしながら、確実なものとしていきたい。

副論文

副論文

〈私は家を作りたい〉  
 〈愛の妙薬〉より 〈人知れぬ涙〉  
 G. ドニゼッティ 作曲

《私は家を作りたい》

《私は家を作りたい》は民謡風の歌曲で、詩が作者不詳のため、ガエターノ・ドニゼッティのオリジナルではなく、もともと存在する民謡を編曲したのではないかと考えられている。しかし、メロディメーカーのドニゼッティが描いた作品が、民謡となったという説もある。

《愛の妙薬》より 〈人知れぬ涙〉

〈人知れぬ涙〉は《愛の妙薬》の劇中に使われているアリアであり、珠玉のオペラアリアとも言われている。劇中では、主人公のネモリーノが村の娘アディーナの流した涙を見て自分が彼女に好かれていることを知ったネモリーノの喜びが歌われる。

## 丸川 琉人

Marukawa Ryuto



## 《第9》の成り立ちとその歴史 — その背景と影響を探る —

本論では、ベートーヴェン作曲の《交響曲第9番》が、現代まで演奏され続けられる理由、そして交響曲に合唱がつけられた理由について、本曲が作曲されるまでにベートーヴェンが受けた歴史的要因について明らかにした。

第1章では、《第9》に影響を与えた交響曲について記した。《第9》と《運命》《田園》との結びつき、また、「共同体音楽」としての《第9》について述べ、《第9》の成り立ちについて明らかにした。

第2章では、シラーの詩との結びつきについて記した。《第9》の最終楽章「合唱付き」と呼ばれるものに、シラーの

詩である《喜びに寄せて》が使われている事に触れ、この詩を「集いの歌」と呼んでいたことがケルナーの手紙から読み取れる。

第3章では、《第9》の歌詞の意味について記した。第1節から第4節までの歌詞の意識を行い、最終楽章の元となるシラーの「喜びに寄せて」がフランス革命的な「人間の自由・平等・博愛」を歌うものとして後世に残したことがわかる。

第4章では、日本での《第9》の存在、および《第9》を演奏する意味について記した。戦前から、戦後まで演奏された《第9》は年末の演奏だけではなく、地域おこしや復興支援

の演奏など、特別な機会に演奏される特徴がある。

《第9》は、交響曲としてだけでなく、「共同体音楽」「集いの歌」としての意味を持っている。本来オーケストラは、敷居が高く、貴族の権威や体制の安定を目的としたものであったが、《第9》は一般市民のために作られたものであると考えられる。

現代でも演奏が続けられるのは、ベートーヴェンが聴衆や演奏者の心や意思の一体化を目的として《第9》を完成させ、「共同体音楽」として《第9》が引き継がれているからであると著者は考える。

《2つのアラベスク》より 第1番 ホ長調  
 C. ドビュッシー 作曲

《2つのアラベスク》は、ドビュッシー(1862-1918)の作品の中で、もっともポピュラーな曲であり、広く親しまれている。

1890年ごろを境に、それまで歌曲を多く書いていたドビュッシーは、ピアノ小品の出版に精を出すようになった。1888年ごろに作曲され、1891年に出版された《2つのアラベスク》はその頃の作品の一つである。

この楽曲に見られる、繰り返しながら発展していく旋律モチーフや、生き生きと躍動するリズムは、ドビュッシーののちのピアノ曲にも共通する特徴を確かに提示している。

《アラベスク》第1番では、冒頭部分が左手、右手に分かれているが、1つの手で弾いているかのように流れて弾くこと、また伴奏が加わった場合にも、旋律をくっきりと浮かび上がらせることを特に意識して演奏したい。また、自由な形の曲なため、楽想として全体が固くならないよう、柔らかい印象で弾くことを意識したい。

## 三浦 綾也那

Miura Ayana



## 小学校音楽科におけるインクルーシブ教育 — 発達障害のある児童に向けて / 器楽授業でのアプローチ方法 —

本研究は、通常学級内での発達障害のある児童に対する支援方法について、小学校音楽科の器楽授業に焦点を当て、明らかにした。目的は、通常学級内における、発達障害のある児童へのアプローチ方法を明確にし、障害の有無に関わらず、すべての児童が共に学ぶ、共生社会への実現への手立てであるインクルーシブ教育システムの導入を提案することである。

通常学級内に在籍する発達障害のある児童の割合は、年々増加している。そこで、発達障害のある児童に対する、特別支援の仕方について、文献を精査した。並

行しボランティア校での児童の様子を観察し、実際に行われている特別支援を考察した。

次に、文献にあげられた実践例や、ボランティア校での児童の様子から、器楽授業における発達障害のある児童への支援方法を明確にし、授業提案を行った。

本研究より、視覚的要素や身体表現を取り入れることが有効であることが明らかになった。また、特別支援を要する児童一人ひとりのニーズに合った支援を提案すること、各児童に合った活動のレベルや目標を設定することが重要であることも、また明確となった。

他方、学級経営の視点より教師に出来ることは、多様性を認め、助け合うことのできる、学級づくりをすることだと考えられる。日頃から、ペアやグループで協力し合う活動を取り入れることや、困っている人がいたら助けようという声かけを行っていくことが大切である。

教師になった際には、学級全員で一つの活動を達成させる経験など、互いを認め、学び合う音楽の授業づくりを行うことや、本論文で提案した支援方法などをさらに深め、実践していけるよう努めていきたい。

# PIANO

ピアノ

## 〈前奏曲とフーガ〉ニ長調 BWV532

J. S. バッハ = F. ブゾーニ 作曲

《前奏曲とフーガ》ニ長調 BWV532は、J. S. バッハ(1685-1750)の初期のオルガン曲(1710年頃)をF. ブゾーニ(1866-1924)が1888年の春、オルガン曲からピアノ曲のコンサート用作品へと編曲したものである。ブゾーニはドイツ系イタリア人の作曲家・ピアニストであり、他にも教師、指揮者、理論家、編曲者、そしてバッハの楽譜校訂者としても活躍した。

元はオルガン曲であるため、オルガンの足鍵盤で演奏される部分をピアノでは左手で演奏されるように編曲されている。前奏曲は、壮大な部分と、レガートで落ち着いた部分の対比がある。続くフーガは、主題のモチーフが声部を増して重厚に変化していく。オルガンにはないピアノの重厚な響きと和音の豊かさを表現したい。

### 持田実穂

Mochida Miho



## 日本のパイプオルガンの歴史 — データから見る日本全国のパイプオルガンの特徴について —

本論文は、日本において教会以外に設置されているパイプオルガンについてまとめたものである。

ヨーロッパでは教会と共にオルガンが発展してきたが、日本はヨーロッパに比べると教会は少なく、さらにオルガンが設置されている教会自体も少ない。しかし、日本ほど多様な国からオルガンが輸入され、設置されている国は珍しいという。

ネットや本の情報を集計すると、日本の教会以外にあるパイプオルガンは、特にドイツ製、日本製、フランス製、アメリカ製のものが多い。つまり、日本では様々な国のオ

ルガンが施設に設置されていることから、多くの国の歴史や風土、国民性をオルガンの音から知ることができる。

他方、令和の時代における日本のオルガンの発展については、日本古来の和楽器の音色をオルガンで作成、そのオルガンにしかできないオリジナル作品を作曲することが考えられる。1台で多くの音を調和させることができるオルガンの利点を生かし、海外の音と日本の音を融合させることで、日本人にとってオルガン音楽と日本音楽がより身近な存在になると考えた。

さらに玉川学園のパイプオルガンについても研究し

た。玉川学園の礼拝堂にオルガンが設置されたのは1931年である。当時、オルガンは上野の音楽学校(現在の東京藝術大学)や三越など日本にまだ4台しかなかった。玉川学園創立者の小原國芳先生は、音楽によって学園の精神的な基礎づくりを行うことが信念であり、1930年にオルガン製作世界一の会社であるシカゴのキンボール社に行き、直接交渉の末、パイプオルガンを購入したという。筆者は、来年から玉川学園の事務職員に就職する。小原國芳先生の信念と学園の歴史を学び続け、少しでも玉川学園と社会に貢献できるようにしたい。

# SINGING

声楽

## 歌曲集〈音楽の夜会〉より 〈約束〉

G. ロッシーニ 作曲

## 歌劇〈ランメルモールのルチア〉より ルチアのアリア 〈あたりは沈黙に閉ざされ〉

G. ドニゼッティ 作曲

〈約束〉は、ロッシーニ(1792-1868)によって作曲された《音楽の夜会》(1835)という歌曲集に収められている。「決してあなたを愛することをやめたりしない」と深い愛を誓い、約束する美しい歌曲である。

歌劇《ランメルモールのルチア》(1835)は、ドニゼッティ(1797-1848)によって作曲されたオペラである。敵対関係にある一族のエルガルドと恋に落ちるルチアが、兄のエンリーコによって仲を引き裂かれるという愛の悲劇だ。

〈あたりは沈黙に閉ざされ〉は、第1幕で主人公のルチアによって歌われる。恋人であるエルガルドと密会するために城を出たルチアが、不吉で恐ろしい物語を、侍女アリーサに話して聞かせ、自分もその運命になってしまうのではないかと恐れる場面である。

### 森 文葉

Mori Ayana



## 音楽を活用したスクールカウンセリング

本研究では、主に中学生を対象に、スクールカウンセラーや音楽療法について研究し、生徒に起こっている問題や生徒が抱えている悩みに寄り添うためにはどうすれば良いのかを考え、解決の糸口を模索した。

第1章では、スクールカウンセラーについて研究した。スクールカウンセラーに必要なことは「資格」ではなく、対応する生徒に寄り添い、味方になれる人という「資質」なのではないかと考えた。また、中学生に行なったアンケートの結果から、彼らにとってスクールカウンセラーは必要な存在であると考えることがわかった。

第2章では、音楽療法の歴史や方法・形態について記した。音楽療法は、安全な治療法として考えられ、スクールカウンセリングに活かせると思われた。

第3章では、スクールカウンセリングで音楽を活用する条件や課題、メリットを考察した。カウンセリングを行うには、広い部屋よりも狭い部屋が適していると明らかになった。また、対応する生徒に合わせた音楽を提供し、話しやすい環境をつくるという、「受動的音楽療法」を用いることが最も適切なのではないかと思われた。

しかし、この方法は、対応する生徒やカウンセリングを行

う学校によって異なることを忘れてはいけない。そのため、リラクゼーション効果などのメリットだけでなく、音楽を使用する場所や、一人ひとりにあった効果的な音楽やカウンセリング方法を探さなければならない、という大きなデメリットもあり、まだまだ課題は残った。

悩みや問題を抱えた生徒が一人でも前向きに生きられるような環境を整えるため、今回の研究で残った課題を、今後も追求すべきであり、いつかスクールカウンセラーという職業やカウンセリングルームという場所や存在が、生徒や学校にとって必要でなくなることが筆者の理想である。

副論文

副論文

## 《2つの伝説》より 第2曲〈水の上を歩くパオラの聖フランチェスコ〉 S.175/R.17

F. リスト 作曲

この曲は、フランツ・リスト(1811-1886)が所有していたエドヴァルト・フォン・シュタインレの線画と、ジュゼッペ・ミシマツラの著書『パオラの聖フランチェスコの生涯』から靈感を得て作曲された。この伝説とは、外見上の貧しさを理由に船頭から乗船を拒まれた聖人がメッシーナ海峡を歩いて渡ったというものである。

曲はゆったりとしたアンダンテ・マエストーンで始まり、徐々にゆったりしたメロディに動きが加わる。暗く、激しい半音階や和音の連続の先には神々しく輝かしい旋律が待ち受けて壮大なクライマックスを迎える。ここでキーワード「charitas(慈愛)」と楽譜に書き込みがある。最後は静かに最初の旋律が再帰し、徐々に和音が増し、fffで華やかに終わる。

## 森 紗弥加

Mori Sayaka



## 中学校の音楽教育に求められる「感性の育成」についての考察

「感性」という言葉は、平成元年(1989)告示の学習指導要領の「音楽」の目標で初めて記されてから、音楽教育において重要なキーワードとなっている。約30年もの間、学習指導要領の中に存在し、音楽教育において重要とされてきた。

この研究の第1の目的は、音楽教育において「感性の育成」とはどのようなことを指すのかを、明確にすることである。「感性の育成」を授業に具体的に落とし込み、より効果的な授業展開をするために必要なことは何なのか。筆者はこの論文で「感性の育成」の要点を整理、また

研究して、実際に教壇に立った時の授業に生かしていきたいと考えた。

感性についての定義を先行文献や辞書、各校種の学習指導要領など、様々な視点から確認し、それらを踏まえて、感性の育成にはどんな手段が有効なのかを考え、それぞれ一つずつ挙げ、指導案を作成した。

結論として、筆者は「生徒が音楽に触れた時に感じたことを価値あるものとして感じる時に感性が働く。感性は、感じたことを言語化するなど形のあるものにしたリ、

それを共有したりすることにより、育てていくことができる」と考えた。音楽の授業においては、楽器で表現すること、また表現された楽曲を鑑賞することによって、何かしら感じることを得る。その感じたことを個人でなるべく具体的に言語化し、グループ活動やペアワークなど少数の活動で情報を共有する。改めて音楽を演奏し、鑑賞する一連の流れによって、感性を育てることができると考えた。

今回の研究を踏まえ、教育現場で生徒の感性を存分に伸ばしていきたい。

## 《ロマンティックなワルツ》

C. ドビュッシー 作曲

C. ドビュッシー(1862-1918)の《ロマンティックなワルツ》(1890)は、ヘ短調で始まり、最後はヘ長調で終わる。ワルツ特有の4分の3拍子で進行する小品である。1890年前後の他の作品には、《ベルガマスク組曲》《二つのアラベスク》《マズルカ》《夢想》などの作品がある。いずれも、同時期の歌曲ほど思いきった試みや展望を広げるような発見はなく、習作の域をさほど出ない出来のものが多い。独自の技法は確立されておらず、ショパン、ポロディン、マスネ、サン＝サーンス、フランク、フォーレなどの影響が色濃く出ている作品が多い。

調性や楽想によっていくつかの部分に分けられるが、それぞれが独立しているのではなくアタッカで続き、冒頭のテーマも回帰する。そして、長く華やかなコーダでフィナーレを迎え、きらびやかに終わる。

## 門馬小夏

Momma Konatsu



## 幼児教育におけるリトミックの効果と必要性 — 指導案の提案 —

リトミックは、スイスの作曲家・音楽科教育者であるエミール＝ジャック＝ダルクローズ(1856-1950)が20世紀始めに創案した、音楽で身体を動かしながら学ぶことができる音楽教育法である。なぜ、世界中で幼児教育にリトミックがこんなに積極的に取り入れられているのか。また、幼児教育においてリトミックはどのような効果があり、必要性があるのか。筆者はこの観点に注目して、幼児教育におけるリトミックの必要性と意義について考察した。

研究方法としては、先行研究の資料やデータ、参考文献を中心に読み解いていき、幼児教育とリトミックの関

連性を研究した。次に、幼児教育のリトミックの効果と必要性を論じ、筆者が考えるリトミック教育を提案した。そして、幼児教育におけるリトミックの可能性について述べた。

研究結果として、リトミックは音楽能力が高められるだけでなく、適応能力や身体能力、そして幼児期にとっても大切な集中力やコミュニケーション能力、自己表現を高めることができることがわかった。幼いうちからリトミックを行うことで、幼児の成長過程においてプラスに働くことができるのだ。

幼児教育にリトミックが多く取り入れられている一番の理由は、リトミックを通して集中力やコミュニケーション、自己表現を高めるためだと筆者は考える。リトミックはこれらを高めるために最適な方法であると考えられる。しかし、リトミックはすぐに効果が出てくるものではない。そのため、集中力の低い幼児にどう持続させてリトミックを行うかが今後の課題であると考えた。今後は、考えた指導案をもとに実際に幼児教育の現場で実践をし、そこから更に幼児教育におけるリトミックについて探求し、時代にあったリトミック教育を実践していきたい。

## 〈リゴレット・パラフレーズ〉 S.434/R.267

F. リスト 作曲

F. リスト(1811-1886)は、オペラのメロディをモチーフとしたピアノ曲を数多く残している。それらは、ピアノ演奏のヴィルトゥオーゾだったリスト自身の演奏会用として書かれたものだけではない。《リゴレット・パラフレーズ》(1859)は、リストがピアニストを退いてから、彼の弟子であった、ハンス・フォン・ビューロー(1830-1894)のために書いたものである。《リゴレット・パラフレーズ》はジュッペ・ヴェルディのオペラ《リゴレット》(1851)より、第3幕の四重唱〈美しい恋の乙女よ〉をモチーフとした左手のフレーズから始まる。中盤では原曲を忠実に再現しつつも、随所にリストらしい音階やアルペッジョが盛り込まれ、華やかなオクターブの連続で幕を閉じる。

## 安田晴香

Yasuda Haruka



## 小学校の「音楽づくり」を取り入れた中学校音楽科の「創作」授業の提案

本論文では、楽譜を使わずに中学校音楽科の創作の授業をどのように行っていくことができるのかを提案するものである。

具体的には、中学校と小学校の学習指導要領から創作や音楽づくりで身につけるべきことを比較し、学校で行われている授業を考察した。さらに、小学校で行われている音楽づくりやコンピュータを使い、楽譜を使用しない中学校創作の授業を提案した。

学校で行われている授業例は楽譜が多く使われているにも関わらず、学習指導要領によると創作の授業に

おいて記譜の技能は特に求められていないことが判明した。また、小学校の音楽づくりは音そのものに重点を置いているが、中学校の創作では音そのものを意識する機会が設けられていない。本論文では、音の素材そのものを大切にサウンドスケープの考えに触れながら、コンピュータを取り入れ記譜の作業を省くことで、生徒が音色を聞いて工夫する力や、音楽を構成していく力など、本来の創作の力を身につけることが出来ると結論づけた。

創作をする際、ほとんどの場面で楽譜が使われる。し

かし、楽譜を書くことは難しい作業であり、記譜を苦手とする生徒がついていけなくなる可能性がある。しかし、記譜ができなくても、コンピュータを使うことで誰でも作曲をすることができる。これからの生徒には、人間的な心の成長、コンピュータを上手に使いこなすスキルの両方が必要になる。創作の授業は現在も試行錯誤がなされているが、生徒が音楽活動の楽しさを通して、感性を養うことや生涯音楽に親しめるようになるために、次々と変わっていく時代と共に指導方法を考えていくことが、一番重要なのではないかと考える。

## 〈フィレンツェの花売り娘〉

G. ロッシーニ 作曲

《フィレンツェの花売り娘》(1848)は、イタリアのフィレンツェにいる花売り娘を表現している曲である。街ゆく人々に花を買ってもらえるよう振る舞う様子は、一見マッチ売りの少女にも見えるが、華やかな街フィレンツェはそう一筋縄にはいかない。ただ声をかけるのではなく、ある人には「愛のように枯れない薔薇なのです」と売り込んだり、またある人には自分の母親の話我突然始め泣き出し、「お金ではなく、パンが欲しいのです」と嘆いたりする。もちろん、本当に欲しいものはパンではなくお金である。この花売り娘は、相手によってセールストークをがらりと変える、なかなか不器用な賢いちゃっかり者なのである。

この可愛らしく、元気な花売り娘の魅力を表現できるよう、明るく華やかに歌いたい。

## 山口真央

Yamaguchi Mahiro



## 中学校音楽科における日本伝統音楽の教材化 — 安里屋ユンタを教材として —

本論文は、中学校音楽科における日本伝統音楽の教材化を目的としている。平成29年(2017)年に告示された『中学校学習指導要領解説 音楽編』では、日本伝統音楽を授業で扱うことがより重要視されるようになった。しかし、筆者は実際の中学校の現状や、日本伝統音楽を扱うことに対する課題などに疑問が湧いた。本研究では、中学校現場における事例研究とインタビューによって、実際の現場での課題を明確にし、その課題が行けるための学習指導案を作成した。

具体的には、横浜市内の中学校2校において、計3時

間の授業を参観し、その記録と考察を行なった後、それぞれの音楽教諭2名へのインタビューから、当事者の意見や考えをまとめた。これにより、「教員の日本伝統音楽の歴史や和楽器の奏法に関する知識が十分でない」「日本伝統音楽において、歌唱の授業が行われていない」「学校における和楽器の備品不足」「授業時間数の不足」という4点の課題が明確になった。

この4点の課題を踏まえ、筆者は沖縄の民謡『安里屋ユンタ』を教材とし、歌唱と鑑賞を関連づけた授業を提案した。歌唱と鑑賞の分野を選択することで、学校に十

分な和楽器の備品がなくても授業をすることができ、また教材を関連させることで授業時間数の削減も目指した。

本研究で示した4点の課題は、授業の質改善のみで解決することはできない。音楽教育全体が抱える大きな問題であると筆者は考える。我が国の伝統音楽を生徒が学ぶ意義を今一度見つめ直し、生徒が自らの生まれ育った国の音楽に、愛着や誇りをもつことのできるような授業を追い求めていかなければならない。

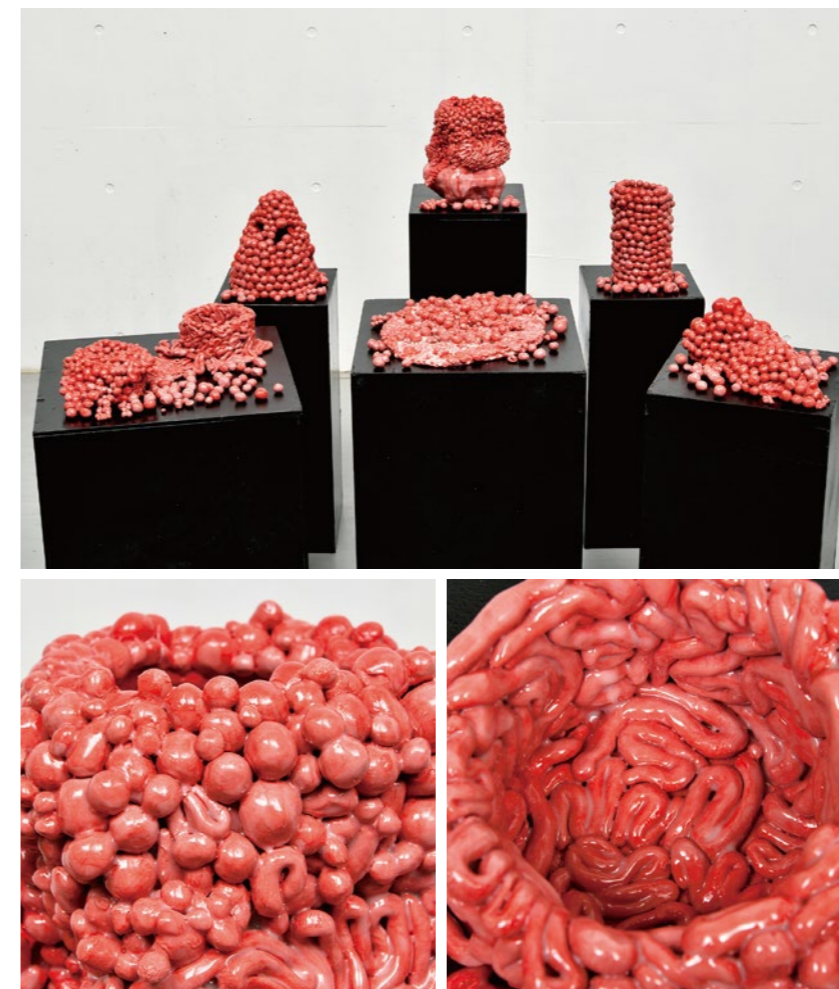
# ARTS & CRAFTS

美術・工芸コース

## 生命

250×400×150mm、250×250×300mm、  
650×280×110mm、250×220×250mm、  
170×170×250mm、300×450×50mm  
半磁器土(ピンク)、手びねり

数多くの細胞が集まり、分裂を繰り返し我々の体はできている。そんな体内での活動や生命の営みを表現した。いっけん同じ球体や曲線の集合体に見えるが、同じものは存在しない。形や大きさにそれぞれに違いがあり、それぞれの個性がある。ピンクや赤で生々しさを表現しつつもポップな色合いにすることで、鑑賞者の印象に残る作品を目指し制作した。



## 内井光貴

Uchii Koki



### 副論文

#### 死生観をテーマにした作品から学ぶ「生きる力」 — 松井冬子作品を題材とした美術科における鑑賞活動 —

教育現場では命を大切にすることが重視されている。筆者が中学生の時よりも重きを置いているように感じる。その背景には、いじめや自殺の増加があげられるが、子どもの命を預かる場でこのような問題はあってはならない。昨今、命を大切にすることが道徳の強化が進められているが、筆者は美術科でも可能ではないかと考えている。本稿では美術科だからこそできる命を大切にすることが何を研究し、指導案につなげた。

第1章では本稿での研究目的と死生観の定義を記し、命を大切にすることが扱った日本画家松井冬子の作

風や松井が考える死生観について述べた。また指導案で扱う作品2点についての作品解説に加えどのような授業内容で核にし込めるのかを述べた。

第2章では現在の中学生が持つ死生観について述べた。加えて、現在の教育現場で取り組まれている死生観や生きる力を育む教育について研究し、そこから出てきた課題について述べた。

第3章では、第1、2章での研究をふまえて指導案を作成した。鑑賞分野での指導案を考え、作品鑑賞を通して生徒の考えや感じたことを大切にすることができた。

他者の価値意識にも触れることで「生と死」や「生きる力」についてより深い理解ができるように授業展開とした。この授業では次のことを核とした。これから社会に出ると「死」という場面に遭遇することになるだろう。家族や友人などの死に対して悲しさや寂しさなどの感情が湧くだろう。しかし、死者が生前に生を全うしたということを尊重し自分自身の「生きる力」に変換してほしい。私はまだ教員として現場の経験がないため、これから経験を積み本稿で記した授業を行えるように精進していきたい。



童心に帰る 「BUNBOOG!」「僕的心もニコちゃん」「僕のカブトムシが、格好いい。」

1000×803mm 1点、455×380mm 1点、530×455mm 1点  
 アクリル、グラフィティーマーカー、キャンバス



私は子供の頃、大人になってみると感じない、考えないようなことばかりを求めていて、そのような日々がとても充実していた。玩具や自然の生き物などに触れて感じたこと、考えたこと、そこから閃きを得た瞬間を表現した。本作品の描写方法は、隠し絵の要素もある。その隠された形を探検するように見て欲しい。

榎並 諒  
Enami Ryo



形や色に手で触れて遊ぶ玩具の良さについて — LEGOの玩具を教育に活かすには —

本論では、LEGOの玩具を使った活動を行い、手で触れて遊ぶよさを児童に伝えることを取り上げた。最近では「アナログ玩具離れ」と聞くように、手先を器用に使うことで遊べる玩具への子供の興味も薄れている。本論では、美術活動と教育の観点からLEGOの玩具を用いた活動の特徴を考察し、また子どもの成長段階において手で触れて遊ぶことの重要性を指摘した。その上で、児童が手で遊ぶことのよさを実感できるような具体的な活動の立案を行った。

第1章では、なぜLEGOの玩具が昔から現在に至るま

で、多くの人に遊ばれ、愛されてきたのか考察し、さらに子供時代に手で遊ぶことの教育的意義を明らかにした。第2章では、子供の成長にはアナログ玩具の活用が有効であると考え、に至ったこれまでの経験をもとに教育素材としてのLEGOの魅力について触れ、アナログ玩具で遊ぶ経験を通して、児童が身につけ得る能力を明らかにした。その上で、アナログ玩具が子供の成長にとって重要性をもっていることを説いた。

第3章では、LEGOの玩具を活用し、筆者が育成したい能力を明確にした。これらの能力を育成するための具体

的なワーク内容を考案し、子供の時期に手で遊ぶことのよさを実感できることが教育に有効であると結論づけた。脳の発達には手を使うことによって促される。特に子供の時期は脳が活発に働くことにより、発達の効果も大きい。近年、技術進歩によりタブレットなどのデジタル玩具の普及が著しい。デジタル玩具で遊ぶ際、手の動きに関しては、ボタンを押すなどの単純な指先だけの動きで完結してしまう。このような遊びだけではなく児童期には、アナログ玩具を使って特に手指をよく動かして遊んで欲しい。

黎明

910×1168mm 2点  
 油彩、キャンバス



本作品のテーマは「好きなもので出来た私」として制作をした。植物を組み合わせて描くジュゼッペ・アルチンボルドのように、私の好きなものや思い出のあるものを詰め合わせている。作品タイトルにある「黎明」は太陽が昇る天体現象と、人間社会での文化活動などで、新しく物事が始まろうとする時を表している。故に、これからの私たちへの想いを込めている。

遠藤一弘  
Endo Kazuhiro



中学校における「トリックアート」を題材とした授業提案 — トリックアートの魅力と指導案 —

昨今では芸術鑑賞および美術に興味・関心をもつ人が減少していることが内閣府の世論調査のデータに記されている。筆者自身、教育実習を通して美術を苦手とする生徒がいることを痛感した。しかしながら、思春期は自我を探究し、在り方を確立する時期ともされている為、様々なものに興味をもちやすい。この時期に美術の面白さを知ってもらうきっかけとして本論ではトリックアートの魅力を扱った授業案を出すための研究を行った。

指導案をつくる上での題材として、私が美術に興味

をもち始めたきっかけである「トリックアート」を用いて考えた。筆者自身、なぜトリックアートに心惹かれたのか、その魅力について分析を行った。トリックアートとは人間がもつ視覚を利用し「立体的に見える絵画」や「観る角度により印象が変化する作品」など平面のものを立体的に描き表す作品のことである。作品によっては自身も作品の一部として一体化できることから親しみやすいものとなっている。これらの魅力を基に、誰でも楽しめる「トリックアート」を題材に、授業計画の序盤にトリックアートを扱った展示会に足を運び実際

の芸術と触れ合う事で他の美術作品への興味や今後の制作に対する意欲や発想力、創造力がより豊かになっていくのではないかと結論付けた。以上を踏まえ、美術に興味や関心をもたせたいことからトリックアートの魅力や楽しみ方を「美術科教育」という観点から述べてきた。芸術に関心をもつ人は、ビジネスの面でもクリエイティブな思考で物事を展開できる。今後も芸術および美術に対して興味をもてるよう、筆者自身もより一層研究し発信するとともにトリックアートの有効性が活用されるよう期待したい。

Parc du bonheur

652×910mm 4点  
油彩、キャンパス



本作品は印象派の筆触分割、特にジョルジュ・スーラが用いた点描の技法を用い、思い出の場所をテーマに制作した。様々な異なる時間の光を、鮮やかな色彩で表現する印象派の特徴に準えて、幼い頃の思い出の場所を、春・夏・秋・冬の4場面に分けて描いた。色彩を幾層にも重ね、優しく柔らかい、思い出の中の光を表現することを目指した。

菰田沙矢佳

Komoda Sayaka



新学習指導要領の「知識」を重点化した美術科の授業 — 印象派における筆触分割の技法を用いて —

本論では印象派筆触分割の技法の光の捉え方を活用し、中学校学習指導要領の共通事項「知識」(1)ア「形や色彩、材料、光などの性質やそれらが感情にもたらす効果などを理解する」に着目し、自分だけの色で光を捉え表現の幅を広げるために最も効果的な指導内容及び展開を研究した。

既存の印象派の指導案を参照、比較すると多くが美術史や鑑賞で印象派を取り扱っており、表現活動で印象派が取り上げられている事例が極端に少ないことがわかった。また中学校で扱われている教科書には印象派の作品がいくつも掲載されていることから印象派は中学校美術科

で取り扱う題材として最も欠かせないものであることもわかった。印象派筆触分割で共通事項「知識」(1)アを深く身につけるためには鑑賞活動で得た学びや気づきを知識で留めてしまうのではなく鑑賞と表現を並行して行い描画活動を実際に行う授業に変え、得た表現方法の知識を自身で理解して落とし込んでいく活動が必要不可欠であることがわかった。さらに新学習指導要領に移行するにあたり、より主体的・対話的で深い学びにつながる指導が求められていることから美術科における既存の印象派の授業を見直し、主体的・対話的で深い学びに繋げるための印象

派の指導案を研究した。

学習指導要領の共通事項「知識」(1)アを印象派の技法、筆触分割と結びつけ色彩や光が人の感情にもたらす効果を深く身につけるためには、鑑賞で感じたこと気がついたことを対話活動で広げ、印象派について知り、鑑賞活動で得た気づきや興味関心をもとに表現の活動で実際に制作することで技術として理解しながら落とし込んでいくことが重要である。本論で研究した結果、鑑賞と表現の活動を並行させた授業は得た知識を体感的に落とし込み、深め広げることができるという結果を得ることができた。



no name

1000×1000×200mm  
陶土、亜鉛結晶釉、板づくり、手びねり

亜鉛結晶釉を作品に取り入れ、タイル状に底面を構成した。結晶は個々に表情が異なり同じ模様が無い。タイルの上に置かれたフィギュアも個性を持ち、互いに存在を主張している。綺麗なものはなんだろうか。目の前に見える景色や人工物だけでなく、まだ見えていないものが足元にあるのかもしれない。そのような思いを作品に込めた。

島崎脩嘉

Shimazaki haruka



亜鉛結晶釉について — 結晶の実験と考察 —

筆者が陶芸に深く興味を持ったきっかけは、曜変天目茶碗の存在を知ってからである。天目茶碗について調べていた折、「亜鉛結晶釉」を担当教授から告げられた。どのようにしたら結晶が出るのだろうと思い、研究の題材に決め情報を収集し、実験を重ねて追求と考察をした

第1章では、亜鉛結晶釉について記した。第2章では、入手可能な一般書籍本などからの情報だけでは制作方法全体を理解しがたい為、筆者による陶芸家高津潤一郎氏への聞き取り調査を行い、亜鉛結晶釉の具体的な制作概要と工程手順を記した。第3章では、釉薬

実験の目的と方法を記した。実験を3つの手段で行なった。1つ目は、窯における温度管理(焼成方法)により、亜鉛結晶の発生が異なるのか。2つ目は、基礎釉に金属酸化物を加えると色鮮やかな結晶となるが、それによって結晶が出るのか。3つ目は、結晶の発生原理、発生点をつけることで意図した場所に結晶を出すことが出来るのか。これらの実験計画と結果グラフや画像でも説明し分析した。

今回の一連の実験から、亜鉛結晶は最高温度から急激に温度を下げ、2時間温度を保持することにより大きな結晶を得られることを確認できた。冷却時の温度を保持する

ことにより結晶が成長することが分かった。そして、酸化物を添加することで色鮮やかな結晶を析出できることを学んだ。又、酸化物の性質によって結晶温度に差があるのではないかと分析結果を得た。添加物の濃度についても、それぞれ最適な適量異なることが確認できた。

しかし、焼成温度について、最高温度と結晶温度保持時間の条件の変更によってどの様な変化が見られるか等、結晶釉についての研究実験が十分でないと感じている。今後の課題としてさらに詳しく実験を行い、亜鉛結晶釉を実現する様々なデータを得たいと考える。



私は「愛」の反対は「無関心」だと考えている。本作品ではその2つをテーマに、感情という目に見えないものを目に見える色やモチーフで表現した。

ミュシャの特徴的な線、円や曲線を用いた窓枠のような構図、女性像の表現を研究し、「愛」と「無関心」が背を向け対になるように描いた。花や植物、装飾文様にもそれぞれ意味を持たせている。

眞銅美穂

Shindo Miho



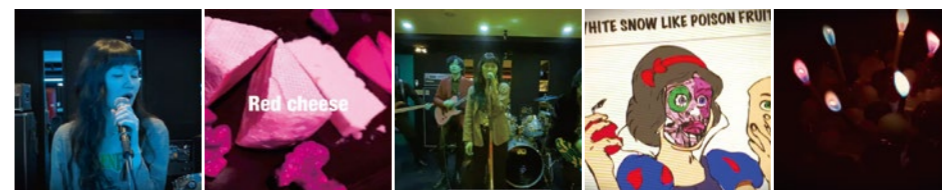
現代の少女漫画に与えたミュシャの影響 — 波津彬子の漫画を事例に —

アール・ヌーヴォーを代表する画家アルフォンス・ミュシャ(1860年~1939年)の作品は、日本では明治時代からその影響がみられ、数々の展覧会が開催されてきた。近年ミュシャの絵画や代表的なポスターなどから、影響を受けた現代の作家たちの作品を紹介し、ミュシャの様式をたどる展覧会も開催された。本稿では、日本の漫画の進化をさかのぼり、なぜミュシャの作品が日本の少女漫画に受け入れられたのかを研究した。

数多くある少女漫画のなかから、本稿では少女漫画家波津彬子(1959年~)の漫画を事例として取り上げ、ミュ

シャの作品と比較分析をした。その結果、少女漫画を描く上で、主人公をはじめとする登場人物(キャラクター)の内面性を表すため、漫画のストーリー展開に読者をより引き込むためにミュシャの描く女性の聡明さ、自由さ、繊細な装飾が参考になっていることを明らかにした。日本の漫画のキャラクターは記号を組み合わせた記号性、成長し死ぬこともある身体性、心を持つ内面性に特徴があるとされ、その内面性をミュシャの作品に見出し、与謝野晶子『みだれ髪』(1901年)の装丁デザインから徐々に水野英子を始めとした少女漫画家へと伝わっていった事がわかった。そ

して、波津彬子の作品に焦点をあて、ミュシャの作品と比較すると、波津の作品にはキャラクターの性格や印象、場面の变化において、ミュシャの作風と重なる表現がある。ミュシャの描く女性と波津の描く女性の違いや、ミュシャの描く女性の有機的な線が、波津の描く淡く繊細な物語とキャラクターを表現して行くのに参考になっていたことが明らかになった。日本の少女漫画における心情表現は大きく変化していったが、少女漫画が発展して行く過程でミュシャの作品が影響を与えていたのは、ミュシャの描く女性の聡明さ、自由さにあったのだと考察し結論づけた。



有名な童話や神話に登場し、世界共通で親しまれているりんご。そんな存在のりんごをテーマに、様々な表現方法で作品を作ることに取り組んだ。まずりんごの曲を作詞作曲し、演奏まで手がけた。曲にちなんだ動画、曲のCDジャケットとしてのグラフィックデザイン、そして、りんごのスピーカーに見立てた立体作品を制作した。

高橋もも

Takahashi Momo



現代アートとインスタグラムの関連性 — レアンドロ・エルリッヒの作品を事例に —

インスタ映えという言葉が当たり前に使われるいま、インスタ映えのための空間に疑問をもつ事がある。本研究では、2017年に森美術館で開催されたレアンドロ・エルリッヒ展を例にあげ、現代アートとインスタグラムの関連性について調べた。レアンドロ・エルリッヒの図録、インスタグラム、美術館のSNSマーケティングの本を活用した。インスタグラムにレアンドロ・エルリッヒの作品がどういった形で上げられ、どのような効果をもたらしているのかを分析した。また、美術館がどのようにSNSを利用し、どういった効果が現れているのか調べた。まず、本

研究で、インスタグラムは現代アートに集客効果をもたらすことが分かった。現代美術館の一つである森美術館は、インスタグラムなどSNS広報にかなり力を入れている。レアンドロ・エルリッヒ展では、歴代2位の観客動員数を記録し、来客へ実施したアンケートからSNSの影響が大きい事が分かった。次に、レアンドロ・エルリッヒの作品は、インスタグラムを通して大量にシェアされていることから、インスタグラムがビジュアル・コミュニケーションとして活用されていた事が明らかになった。彼の作品は参加型なものが多く、参加者が加わる事で作品

が作品として成り立つことから写真とのギャップは少なく、インスタ映えする写真を撮影できる。写真をシェアする事に特化しているSNSツールであるインスタグラムを利用することで実体験との相乗効果が期待できる。こういった事から、美術館という限られた場所で見ることができなかった現代アート作品を、誰もが身近にSNSを利用できる今、インスタグラムなどを利用しシェアすることで、多くの人々に簡単に届けることができる。つまり、芸術表現の媒体として積極的に位置付けする事が出来るのではないかと作例から論じた。

COTOMONOアクセサリー

10×10×20 ~ 150×150×20mm 18個  
金属、ビーズ、食品、ネット、プラスチック



2020年、コロナウイルスは私たちを悩ませ、行動を制限してきた。そんな中で私は、ネガティブな感情をパワーに変えて、ポジティブな作品を作りたいと考えた。そこで生まれたのが、このCOTOMONOアクセサリーである。この作品は、コト軸で考え、その場所からイメージされるモノを使って制作している。ぜひ、作品から、おでかけのワクワク感を楽しんで頂きたい。

濱田 柚子

Hamada Yuzu



1960年代ファッションと現代ファッションへの繋がり

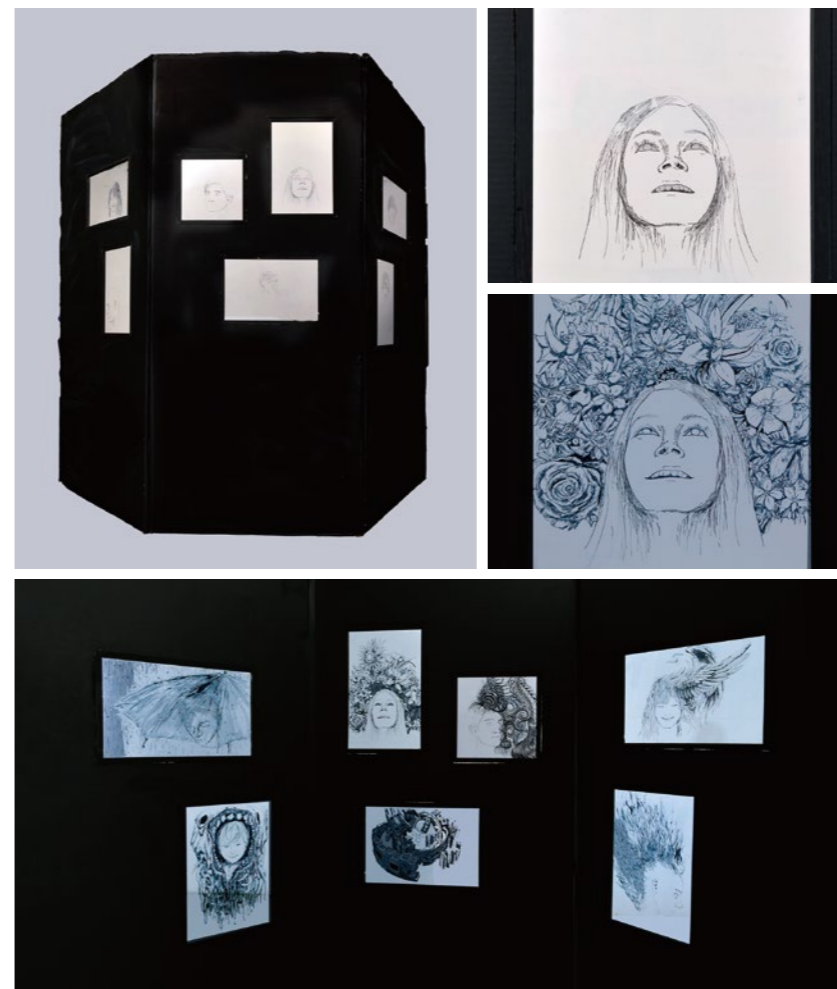
筆者にとってファッションとは、日々を楽しくしてくれるものである。古着やヴィンテージを好む筆者は、母が若い頃に着ていた服を譲ってもらったこともあった。母と2人で買い物へ行った際に、母が若い頃に流行ったものが再流行していることに気づいた。この経験から、私が母の服を譲り受けても違和感なく現代で着られるのだと考える。本論では、過去に流行ったファッションが、どのように現代に取り入れられているのかについてを取り上げることにした。

本論では、色彩や形、素材など、おしゃれに対する考え

が大きく変わった1960年代ファッションに注目している。第1章では、服飾史を振り返り、オートクチュールからプレ・タ・ポルテへ移り変わり、色彩や素材などで特徴を出したスタイルが追求された1960年代ファッションの特徴を捉えた。第2章では、2019年に出版されたVOGUE、ELLEの1年分を元に、現代に1960年代ファッションは取り入れられているのかを調べ、アイテムをピックアップした。第3章では、現代に取り入れられている1960年代ファッションが当時からどのように変化しているかについてまとめた。単に現代風に変化しているのではなく、化

学や技術の発達により、色彩、素材の幅が広がり、アイテムの数も増えていた。これは化学や技術の進歩だけでなく、アイテムを購入する我々が、性別や時代を気にせず、好きなものを好きなように着用して楽しめる時代に生きているということが関係していると考えられる。

本論では、1960年代に注目してきたが、リバイバルブームという言葉を目にするように、他の年代ファッションも現代に取り入れられているため、1960年代以前や以降の流行ファッションにもフォーカスをおいて、これからのファッションに注目していきたい。



心の部屋

「表情」と「心裏」

290×445mm、445×290mm 各3点、295×295mm 1点  
ハーフミラー、油彩ペン、水性ペンキ、ダンボール、木材

本作品は「表情」その裏にある「心裏」を表現している。

ハーフミラーは、光が強く当たる面は鏡になり、その反対の面は透けて見える。この性質を利用し、心の表と裏を可視化した暗室を制作した。

暗室の外側からは人の表情が見え、また、内側に入り裏面から絵を見ると、表情だけでは読み取ることができない感情が見えてくる。

松本 優太

Matsumoto Yuta



印象派と浮世絵の特徴を組み合わせる授業実践 — フィンセントファン・ファン・ゴッホとジャポニズムの関係を用いて —

本論は筆者が中学校の美術教員になった際に、生徒の発想力を広げるためにどのような授業が効果的かを研究したものである。発想力を広げる方法として、既学習済みの2つ以上の技法を組み合わせ、新たな表現方法を生み出すという方法に着目した。

著名な画家が諸外国の文化に影響を受け表現方法を増やした例はいくつもある。中でも印象派のフィンセント・ファン・ゴッホが日本の浮世絵に影響を受け、印象派風の浮世絵を描いた事例がある。身近な日本文化の浮世絵と著名なゴッホを例に授業の作成を行うことで、生

徒が理解しやすく発想を広げることのできる授業作りを目指した。

第1章では、ゴッホや同時期に浮世絵から影響を受けた画家についてまとめた。その結果、画家ごとに浮世絵の特徴の取り入れ方が違うことがわかった。そのため授業の導入でそれらの画家達の作品を鑑賞し、技法同士を組み合わせるにはどのような方法があるかを考えてもらうための参考資料として情報をまとめた。

第2章では、作例の制作や鑑賞方法の考察、学習指導要領との関連付けなどを行なった。授業の内容を徐々に

具体化していき、生徒の発想力を広げるという目標を元にどのような展開ができるか教材研究を進めた。

第3章では、第1章と第2章で研究した内容を元に授業案作成を行った。詳しい目標の設定や評価の規準などを決め、全体の授業計画も作成した。加えて、本論で扱う題材における指導の要となる時間の展開をより詳細に示し、生徒の発想力を広げるための工夫について考えた。

以上により、今まで学んだ知識や技法を生徒なりに解釈し応用する活動が、生徒の発想力を広げるためには効果的であることがわかった。

理想郷から

1120×1620mm  
アクリル、キャンバス



私は、4年間を通し、気球と私の理想郷について描いてきた。また、マグリットによって引き出される、身近な謎と不可思議な空間の表現を追求してきた。

マグリットは《光の帝国》にて、人を描かずして人を描いた。今回、私もそれに倣い、人の気配を演出した。

それが、理想郷から飛び立った気球の風景であり、理想郷から送られて来た切手である。

依田智恵

Yoda Chie



ルネ・マグリットの「光の帝国」 — 光の帝国とは何か —

この論文では、ルネ・マグリットの《光の帝国》について先行文献をあたり、他作品と比較しつつ《光の帝国》に表現されている「光と闇」、そしてタイトルとの関わりについて明らかにしようとするものである。

第1章は、マグリットと作品のタイトルについてである。マグリットにとってタイトルとは、「安全装置」であり、「詩的効果」をタブローと共にもたらすものであったようだ。そして、マグリット自身が積極的に考えるのではなく、友人たちにタブローを見せて、彼らに考えてもらうことが多かったようだ。これは友人たちが思いつくタイトルの偶然

性を求めていたのではないかと結論づける。

第2章では、言葉とイメージに着目し、吹田映子氏のいくつかの論文から、「光と闇」について引用して論じた。「安全装置」のないタブローは、どのように、どのようなものが描かれていたか考察した。描かれているのはマグリットが追求した神秘、つまり身近に隠されているものであり、マグリットはキャンバス上に表すために、鳥籠と卵からきっかけを得た「問答法」を行っていたことが分かった。

第3章では、先述したことを踏まえながら、《光の帝国》についてさらに論考を深める。《光の帝国》とは、マグリッ

トが日常的に目にしていた昼の空と夜の風景を組み合わせたものだ。彼の事物を対等に見る真摯な思考は、相反するふたつの事物をキャンバス上に引き合わせることで、詩的な力を発揮させようとしたのだ。

最後に、「帝国」の言葉のイメージから何を指しているのか仮説を立てる。筆者は、領域も意味するこの言葉は、マグリットの頭の中の隠喩と捉えることも可能だと考える。昼の空に夜の風景を見てふたつのことについて考え、意識下から、闇の中から光、つまり隠されているものを見出し、事物たちが詩的な力を喚起させる領域が広がっている。

矛盾

1167×910mm 2点  
アクリル、布、紙、針金、キャンバス



地球環境問題をテーマにした作品を制作した。

地球環境が「何となく、段々と悪くなっている」と感じつつも自分自身も含め関心を持っている人が少ない状況だと思ったことから発想を得ている。

絵画表現にプラスして今までの制作でも取り入れて来た立体装飾も取り入れることで、4年間やって来たことの集大成となる作品を制作した。

渡邊紗生

Watanabe Saki



シュルレアリスム作品と鑑賞者の受けるイメージの関係

本論では、ルネ・マグリットの作品が鑑賞者に与える影響について考察し最終的に卒業制作へ繋げることを目的としている。卒業制作のテーマは、「シュルレアリスムを通して伝えたい環境問題」である。シュルレアリスムの手法で環境問題を伝えたいと思ったきっかけは、シュルレアリスムの多くの作品は具象的絵画と比べ一度見ただけでは何を描いているのかを理解することが難しい。しかし作品の意図を理解した時にその作品に引きずり込まれる魅力をもっているため卒業制作に活かしたいと思った。その中でも「イメージの魔術師」と呼ばれているルネ・

マグリットに焦点を当てた。研究方法としては、先行文献の分析と実際にマグリット作品を著者が鑑賞するという方法を用いている。研究を通して、いくつかの作品を例に出してきたがマグリットの考えている作品のイメージと鑑賞者が感じる作品のイメージの違いについて明らかにすることができた。またシュルレアリスムのように難しい作品を鑑賞する時に大事なことは考察したことを「言葉にする」という考えに至った。結局のところ、今となってはマグリット自身がどう思い描いてきたのか、何をイメージして描いていたのかわからないものの方が多

い。しかしこれまでマグリットの作品を通して作品とイメージの関係性について考察した結果、作者本人がどう意図をもって制作したかを知ることは難しいが、鑑賞者がその答えにたどり着くまでに感じたことや考えたことを言葉にし、人それぞれの意見をもつことが一番大事なのである。今回の研究を通して、作者の伝えたいメッセージと鑑賞者の受け取るイメージに差異があることがわかった。その上で自分自身の制作においてどのようにしてメッセージを伝え、また鑑賞者側にどう受け取られるか考えてみるのが大切であるという結論に至った。



### 鳥獣戯画 学生乃図

257×7280mm  
和紙、墨

国宝である、高野山の《鳥獣人物戯画》をオマージュし、現代の大学生の学生生活を《鳥獣人物戯画》風に表現した。作品の舞台は玉川大学をモデルにしている。異なる場面が絵巻物のように、右から左へ季節の順に繋がりに流れるように見せている。

鑑賞者が本作品によって、それぞれの日常や楽しかった学生生活を想起し、共感できるトピックを表現するよう心がけた。

### 和山幸恵

Wayama Yukie



### 河鍋暁斎の美人画と人物像 — 《美人観蛙戯図》を事例に —

河鍋暁斎(1831-1889)についての文献や画集に目を通すと「反骨の画家」「戯画や妖怪画」というイメージがつきまとっているように感じられるが、企画展等で著者が実際に観てきた暁斎はそれだけではないという思いが湧き上がった。そこで彼の作品《美人観蛙戯図》(1871)を分析しながら文献を参考に暁斎の人物像についても迫った。

まず第1章では河鍋暁斎の生い立ちや人生の転換になる出来事を追った。次に第2章では《美人観蛙戯図》を著者なりに(同時代、同画題、蛙の作例などから)分析した。《美人観蛙戯図》を「美人画」に位置づけ、暁斎の描いた

他の美人画や同時代の他絵師の美人画と比較し、他絵師の美人画では背景の一つとして描かれる脇役モチーフに関して、暁斎は主役である女性が脇役を見つめることで共に主役に押し上げて表現し、従来の美人画とは一線を画していると結論づけた。また、同作品に描かれている蛙が暁斎の他作品にも度々描かれている事にも注目し、時代の流れや為政の下で遅く生きる日本人を蛙の姿を借りて描いたのもであると推測した。その為暁斎の描く蛙は表情豊かで生き生きとし、《美人観蛙戯図》でも作品の魅力の一角をなしているという気づきを得た。第3章で

は、様々な文献から暁斎の人物像に迫った。

従って、第2章で分析した《美人観蛙戯図》が、暁斎が学び追求した歌川国芳や前村洞和愛徳と狩野洞白陳信、さらには狩野章信、狩野探幽などの先人たちのあらゆる技法を詰め込みつつ、暁斎独自の作風を表現した作品であることがわかった。執筆して改めて感じたのは、暁斎の探究心による多才さである。その器用さゆえにジャンル分けがされがちな日本国内で長い間注目を浴びなかったが、それは暁斎のどこにも属さぬ強みでもあるだろう。そのスタイルは革新的なものだったのではないか。

## MUSIC

音楽コース

小佐野 圭	Osano Kei
佐藤 雄紀	Sato Yuki
清水 宏美	Shimizu Hiromi
辻 裕久	Tsuji Hirohisa
鶴岡 陽子	Tsuruoka Yoko
中田 知宏	Nakata Tomohiro
中村 岩城	Nakamura Iwaki
西 由起子	Nishi Yukiko
野本 由紀夫	Nomoto Yukio
森永 美穂子	Morinaga Mihoko
吉村 温子	Yoshimura Atsuko
渡辺 明子	Watanabe Akiko

## ARTS & CRAFTS

美術・工芸コース

児玉 沙矢華	Kodama Sayaka
高橋 愛	Takahashi Ai
椿 敏幸	Tsubaki Toshiyuki
中島 千絵	Nakajima Chie
村山 にな	Murayama Nina

鈴木 純郎  
(技術指導員)

南 俊輔  
(芸術教育学科助手)

# FACULTIES

指導教員一覧

GRADUATION PROJECTS 2021

玉川大学 芸術学部 芸術教育学科 卒業プロジェクト2021

発行日 2021年2月24日

発行 玉川大学芸術学部芸術教育学科  
〒194-8610 東京都町田市玉川学園6-1-1

編集 芸術教育学科卒業プロジェクト  
記録集編集委員会

デザイン 矢嶋大祐

印刷 株式会社グラフィック



Tamagawa University  
College of Arts  
Department of Arts Education